

アイヌ民族の刀帯

—分類群の共時的分布と通時的変化—

大坂 拓

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 先行研究の到達点と課題
 - 3 分析方法の検討
 - 4 分類の提示
 - 5 共時的分布と通時的変化
 - 6 各博物館所蔵資料における分類群の比率
 - 7 おわりに

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、刀帯 (Sword belt)、製作技術 (Production techniques)

1 はじめに

アイヌ民族の刀帯は、アイヌ語北海道方言でemus at (萱野 1996: 154)、サハリン方言でemusahなどと呼ばれ⁽¹⁾、儀礼の実施にあたって、男性が儀礼用刀を身につけるために使用されるほか (図1: 1)、祭壇への飾り付けにも用いられ、日常的には、儀礼用刀と組み合わせた状態で家屋内部の宝壇に陳列される (図1: 2)⁽²⁾。

移入品の木綿布や自製品の樹皮布を用いて製作されたものと、鞆皮や木綿の経糸と緯糸を編んで製作されたものがあり、後者は1960～70年代にかけて製作技術の伝承が危機的な状況にあるとされたものの (三上 1968、萱野 1978)、その後、技術の伝承が進み、各地で製作され、伝統舞踊公演などの場で使用されている。

本稿の目的は、刀帯のうち、編みの技術⁽³⁾を用いて製作された一群を対象として、製作技術および素材に着目した分類を提示することにある。また、資料の特徴や背景情報⁽⁴⁾を検討して、分類群の共時的分布と通時的変化を明らかにするとともに、変化の背景について若干の考察を加える。加えて、形成時期が異なるコレクションを比較し、コレクション間に認められる組成比率の差異が、本稿で示す変遷案を裏付けていることにも触れる。

先行研究で繰り返し指摘されてきたとおり、国内の博物館等が所蔵するアイヌ民具約6万点のうち、収集年や収集地といった背景情報が伴うものは約3千点にとどまり (小谷 2003)、年代差や地域差の検討には大きな困難がともなう。そのため従来は、儀礼具や木綿衣などの一部の品目に関する優れた研究を除けば、概括的な記述にとどまるか、明確な論拠を欠いた推論が示される傾向があった。

近年では、様々な研究分野でアイヌ民族の伝統文化もまた変化しながら継承されてきたことが強調されるようになってきているものの、物質文化、とりわけ民具資料について年代をおった変化の過程や地域差を具体的な資料によって明らかにした論考は少なく、基礎的な記述を充実させることは緊急性の高い課題といえる。

2 先行研究の到達点と課題

(1) 杉山壽榮男 (1940、1942) の研究

杉山壽榮男は、アイヌ民族の編み・織り技術を網羅的にまとめた「アイヌの編物」(杉山 1940)の中で、北海道・サハリンで収集した刀帯にも触れ、木綿布などを使用したものと、編みの技術を用いて製作したものが存

大坂 拓: 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

- (1) 日本語名称は、刀帯のほか、刀綬、刀吊り帯などが用いられており、今回分析対象とした資料も、所蔵機関によって様々な名称で登録されている。本稿では煩雑を避けるため、刀帯と統一して表記する。なお、アイヌ語北海道方言の名称emus at は、emus「儀礼用刀」、at、atu (hu)「紐。綱。弦」(中川 1995: 10)・「ひも (紐) (何かについているひも)」(田村 1996: 31)を意味する。アイヌ語サハリン方言での名称は山本祐弘の記述 (山本 1970)により、表記を現在広くおこなわれているものに改めた。
- (2) 図1に示した2枚の写真は、いずれも絵葉書などの製作を目的として撮影された可能性が高く、演出が加わっていると考えられるが、刀帯の使用方法を示すという本稿での目的には大きな影響はないと判断した。
- (3) この技術を編みに含める根拠については、本稿4(1)で述べる。
- (4) 本稿では、博物館等に収蔵される資料に付属する情報のうち、収集年代、収集地、製作者、使用者に関する情報を「背景情報」と呼称する。

在することを指摘した。また、編みの技術はtarと呼ばれる荷縄の製作技術と共通すること、北千島アイヌが使用した荷縄にも同様の技術が用いられていることにも言及した。

あわせて、多数の資料の写真図版と模式図を提示し、単色の糸を組み合わせた編み目で形作られる地文、複数の色糸を組み合わせて編み出される文様のバリエーションを明らかにした。また、木綿布などを使用したものに施された刺繍は、編みによる文様を模倣したものとする見解を示した。

通時的变化については、木綿糸が使用される以前には「赤い毛糸」で文様が編み出されていたものと想定し、その素材は大陸から輸入された布を再利用したものとの推測を示した(杉山 1940: 34)。さらに、北海道では早い段階に木綿糸の移入が盛んになったために、「赤い毛糸」を使用したタイプが衰退したのに対し、サハリンでは多く残されているとの見通しまでも示している(杉山 1940: 72)。

くわえて、杉山は自身が調査を行った時点で、編みの技術は既に荷縄にしか用いられなくなっていることを指摘し(杉山 1940: 70)、その要因として、編みの作業コストの大きさをあげ、木綿布の流通量増大にともない廃れたとする見方を示している(杉山 1940: 78)。

(2) 三上マリ子(1968)の研究

三上マリ子は、アイヌ民族の伝承者から直接技術を習得するとともに、児玉作左衛門が収集した資料を中心とした実物観察の所見を加える手法で、アイヌ服飾研究に多大な功績を残した。

刀帯については、旭川市近文在住の伝承者から技術を聞き取った上で、児玉が収集した245点の資料を検討して、経糸の素材や本数、経糸の本数を変化させる手法など、製作技術に関わる主要な観点を網羅的に記述している。

通時的变化については、新井白石による「蝦夷志」の記述と現存する資料を比較し、両者がよく類似することから、長期間にわたって刀帯の形態がほとんど変化していないとした。加えて、顕微鏡観察の所見として、動物の毛を赤く染色した「獣毛糸」が用いられたものがあることを明らかにし、その撚り方向がアイヌ民族が製作する靱皮糸と異なることを根拠として、移入品である可能

性を指摘した。「獣毛糸」を用いた資料はサハリン方面のもので、年代が古いという推測を示している(三上 1968: 39)⁽⁵⁾。

文章の末尾には、当時既に技術の伝承者が稀であるとしたうえで、三上が旭川氏近文在住の伝承者から聞き取った製作技術について論文発表の予定があると記されているものの(三上 1968: 42)、その後、現在まで発表されていない。

(3) 古原敏宏・村木美幸(1998)の研究

古原・村木は、三上(1968)が検討対象とした児玉収集資料のうち、1981年に財団法人アイヌ民族博物館に寄託された149点について詳細な観察をおこなうとともに、各部位の計測値、素材と技法のバリエーションを詳細な観察表にまとめた。

製作技術に関しては、当時、アイヌ民族博物館の職員が伝承者から聞き取った情報が随所に盛り込まれており、完成品からは何うことができない編みの方向(古原・村木 1998: 57)、長さや幅の目安として身体尺を用いることなどが紹介された(古原・村木 1998: 46)。

年代学的変化については、対象資料の全てが収集地・収集年代などの背景情報を欠くため慎重な記述となっているものの、植物繊維や「赤い毛糸」を用いたものを古く位置付ける杉山の推測を首肯している(古原・村木 1998: 59)。

(4) 課題

以上にまとめたように、これまでの研究ですでに製作技術の概要が明らかにされており、経糸の本数や刀通しの製作技術について詳細な記述がなされている。また、「赤獣毛」⁽⁶⁾を用いたものが古く、サハリンで多くの資料が得られるとの見通しも示されている。

こうした年代差・地域差の示唆がなされた背景には、杉山など一部の研究者／収集家がアイヌ民族の居住地を直接訪問して資料を収集していることから、収集の過程で得た知見が加味されている可能性も完全には否定できない。とはいえ、資料の背景情報を根拠として示された立論ではない以上、年代を追って本州以南からの木綿糸の流通が拡大したものとする発展段階論的推測に、北上するほど木綿糸の流通が遅かっただろうという周囲論的推測が加味された結果であった可能性も否定できないこ

(5) 三上は菱形文のものが古いとする推測も提示しているものの、その根拠には国内外を問わず編みの文様は普遍的に菱形が古いという認識が示されるに留まる(三上 1968)。

(6) 三上は「獣毛糸」が杉山の言う「赤い毛糸」と同一のものを指すのか不明としているが(三上 1968)、杉山が示した写真図版(杉山 1940: 図版六六・三)の特徴は三上が指摘したものと共通しているため、同一のものを指すと見なし、以下では「赤獣毛」と記載する。河野広道は、「赤獣毛」はアザラシの胎児の毛をハマナシを用いて染色したものとしており(河野 1953, 1958)注目に値するが、管見の限り河野の記述は民族学的調査による情報か、文献の記述に依拠したものか、資料の観察から判断されたのか明らかではない。



1 刀を佩き祭壇に祈る男性（1930年代・白老町）



2 刀帯を使用して壁面に懸けられた刀（1909年頃・八雲町落部）

図1 刀帯の使用状況

とに、十分な注意が必要となる。現在の資料から、こうした推測がどの程度裏付けられるのか、また裏付けられないのかを確認する必要がある。

また、杉山（1940）・三上（1968）は、ともに当時既に製作技術の伝承者が得がたい状況にあることを強調しているものの⁽⁷⁾、その後、旭川市や浦河町の伝承者による映像記録が公開されるなど（財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1987、1992；財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2007）、各地で技術が継承されてきたことも知られている。杉山や三上が検討した1940～60年代以降、現代までを視野に入れた通時的な変化の検討は、現在まで手つかずとなっている。

以上の認識から、本稿では、資料の情報を基礎として地域差・年代差を可能な限り明らかにすることを課題とし、対象とする年代幅は最古の資料が収集された1880年代から2016年までとする。

3 分析方法の検討

(1) 分析の手順

以下では、第一に対象資料の選定をおこない、第二に製作技術と素材の組み合わせに着目して属性を整理したうえで、属性の組み合わせから分類群を設定する。第三に、分類群のうち主要なものを対象として、背景情報が明らかなものからそれぞれの収集年代と収集地を確認し、分類群の分布と年代学的関係を推測する。さらに第四として、形成時期が異なる博物館収蔵コレクションを単位として分類群の組成比率を比較し、物質文化の変化との関係について考察を加える。



図2 部位名称（北大植物園・博物館 9646）

(2) 対象資料の選定基準

対象資料の選定は以下の手順によった。まず、博物館等が刊行している目録類を参照して簡易な一次リストを

(7) その他の記述として、岡村吉右衛門が1960年頃に平取町二風谷を訪れ、当時80歳代と70歳代の女性から、1世代・2世代上の女性が製作する様子を見たという内容を聞き取ったものが公表されている（岡村 1962：35）。岡村の記述は、資料の観察結果と聞き取りの区分がやや曖昧なため、読み取りが難しい部分があるが、平取町二風谷でも、後述する「一箇所固定型」（図4）の編み姿勢が取られていたことがわかる点など、重要な情報を含む。

作成したのち、明確な背景情報をともなう資料が含まれる資料群を中心として、所蔵館を単位として抽出した二次リスト（掲載資料数318点）を準備した。続いて、二次リスト掲載資料を対象に、所蔵館にて資料調査を実施し、実見可能で、かつ肩部・胴部（図2）の属性の組み合わせを検討可能なものの観察ノートを作成した。その中からさらに、編みの技術によって製作されたものを対象に、241点の属性分析表（表3）をまとめた⁽⁸⁾。

所蔵館を資料選定の単位としたのは、背景情報を有する資料、とりわけ収集地・収集年代が明らかなものだけに限った場合、条件を満たす資料が僅か19点に過ぎないこととなり、属性の組み合わせを用いた分類そのものが困難になることから、資料数を確保するためである⁽⁹⁾。

分布の検討にあたっては、参考資料として、アメリカ合衆国およびロシア連邦の複数の大学・博物館に所蔵される資料のうち、収集地・収集年代が明らかなで、複数の写真を用いて属性の組み合わせが判断できるもの8点を取り上げる⁽¹⁰⁾。この8点を分類を目的とした分析に加えない理由は、筆者自身の実見を経ないため、他の資料と情報の確度が異なると判断したことによる。

(3) 対象資料の概要

北大植物園・博物館所蔵資料

北大植物園・博物館⁽¹¹⁾は、2007年までの悉皆調査（佐々木・古原・小谷 2008）に基づき資料の全体像が公表されており、加藤克による関連記録の整理・公表（加藤 2004、2008）の成果から、コレクションの形成過程に関しても極めて精度の高い情報が得られる。

背景情報が明らかなものの収集年代は、添付されたラベルから1884年収集であることが確認できるもの1点（資料番号9645）、台帳から同年収集と判断できるもの1点（同11018）が最古の資料で、1958年に新冠から収集された1点（同9478）が最も新しい。

北大植物園・博物館では、1933年頃から名取武光、犬飼哲夫によるアイヌ民族資料の資料収集が活発化したことが指摘されており（加藤 2008：57）、各地から伝承者を招へいして熊送り儀礼の記録を作成し、製作された祭壇を収蔵するなど、特色ある資料収集がおこなわれ

た。1936年に新十津川出身の男性から収集されたとの背景情報を有する資料（同11020）については、1937年2月に同じ人物を招へいして熊送り儀礼が記録されていることから、こうした名取・犬飼らの研究活動と連動して収集されていた可能性もある。

ただし、全ての資料が研究者によってアイヌ民族から直接収集されているわけではない。加藤が紹介した「物品監守証書」（加藤 2008：表11）によれば、数多くの資料が古物商などを通じて収集されていることが読み取れ、1934年12月には小樽在住の個人コレクションが3点、1937年には業者を通じて1点の刀帯が寄贈/購入されたことが記載されている。現在ではリストと資料の対応関係は不明となっているが、購入・寄贈資料は博物館に収蔵された時点で一次的な背景情報を失っていたものと考えられる。

欠落した背景情報を補うものとしては、他に写真資料もある。収集地が「沙流」とされる資料（同9653）は、1933年12月10日に北大構内で撮影された写真の中に確認できることから、1933年以前に収集されていたことが判明している（大坂 2016：図6）。

本稿では、総点数32点のうち、編みの技術が見られないもの2点（同11024、11028）、断片3点（同9641、11016、11027）を除いた27点を分析対象とする。そのうち収集年代・収集地ともに明らかなものは4点（14.8%）、収集地のみ明らかなものは4点（14.8%）である。

旭川市博物館所蔵資料

旭川市博物館には、河野広道らが三代にわたって収集した「河野コレクション」寄贈資料のほか、旭川周辺のアイヌ民族から収集された資料が所蔵されており、複数の目録が作成されている（市立旭川郷土博物館 1975；旭川市博物館 2000）。

背景情報が付属する資料の収集地は、サハリンでは落帆、北海道内では千歳と旭川となっている。

「河野コレクション」については、河野広道による調査紀行文（河野 1933a、1933b）や公開されているフィールドノート（青柳編 1982）があり、それによれば、サハリンでの最初の調査は1932年7月16日～8月7

- (8) 背景情報が登録されているものの中には、購入・登録の年代や場所を示すものと推測される場合も多いため、本稿では研究者や収集家がいっここで収集したとの記述があるものを採用することとした。また、しばしば「北海道」「サハリン」とのみ記入されているものもあるが、これも資料の形態的特徴によって後に判断された結果が混同している可能性が排除できない場合が多い。そのため本稿では、B.ピウスツキが収集したものを除き、分布の検討から除外した。
- (9) 比較的大規模なコレクションを有する機関でも、背景情報を有する資料が欠如しているものは、二風谷アイヌ文化博物館を除き、本稿の分析から除外している。
- (10) 海外所在資料に関わる調査は、2001～2003年度文部科学省科学研究費「海外アイヌ資料に基づくアイヌ文化の地域差・時代差に関する研究」（研究代表者 小谷凱宣）によるものであり、写真等のデータは調査に参加した出利葉浩司氏に閲覧させていただいたものであることを明記し、利用を許可いただいた出利葉氏に感謝申し上げる。
- (11) 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。以下では、過去に異なった名称が使用されていた時期を含めて、「北大植物園・博物館」と呼称する。

日にかけて行われ、その後も1942年と1943年に訪問している。ただし、内容は葬礼や儀礼具に関する記述が中心で、その他の民具の収集過程については情報は少ない。河野コレクションのうち、収集地に「オチホ」の情報がある1点（資料番号4237）⁽¹²⁾については、落帆を訪問した記録が1943年8月6日に限られることから、この時の調査で収集された可能性が想定できる。ほかに単に「サハリン」とのみ記載された資料が2点あるが、これは資料に付属した情報なのか、資料の特徴から判断された推測が明らかにできない。

北海道内では、千歳市ウサクマイに居住した男性から2点の刀帯が収集されている（同4189・4234）。この男性は、1931年に北海道大学に招へいされ儀礼の記録作成に協力し、翌年に死去したとされている（河野1933c）。フィールドノートには、1931年4月26日に同氏を訪ねた記録があることから（青柳編 1982：3）、収集はこのとき行われたものと考えられる。

そのほかの資料については、古物商を通じて購入した可能性も含め、背景情報は公表されていない。

本稿では、79点のうち、編みの技術が見られないものの22点（同489・490・4185・4193・4199・4200・4201・4203・4208・4209・4210・4211・4219・4220・4221・4223・4227・4229・4230・4231・4232・7115）、断片3点（同4186・4243・7376⁽¹³⁾）、展示中のため詳細な観察が困難な7点（同493・4187・4204・4218⁽¹⁴⁾・4240・7487・7488）を除いた47点を分析対象とする。そのうち収集年代・収集地ともに明らかなもの、ないし推測が可能なものは6点（12.8%）、収集地のみ明らかなものは3点（6.4%）である。

市立函館博物館所蔵資料

市立函館博物館には馬場脩収集資料11点、児玉収集資料98点⁽¹⁵⁾をはじめ、計120点の資料が収蔵されている。なかでも、八雲町遊楽部のアイヌ民族のリーダーとして著名な男性の旧蔵資料1点は、類例が極めて少ない渡島半島の資料として貴重である⁽¹⁶⁾。

馬場の収集資料はいずれも収集地に関する明確な情報が伴っており、サハリン西海岸のもの7点、鶴川町のもの

の4点からなる⁽¹⁷⁾。馬場は1936年に鶴川町汐見を訪れ、1935～1941年には5回のサハリン調査をおこなっており、資料はこれらの機会に収集されたものとみられる。

児玉の収集資料は、1点に「二風谷」のタグが付されている以外は背景情報を欠くが、1920年代～1970年の間に古物商などを通じて購入したものが大部分を占めるとされる（長谷部 2000）。

本稿では、刀帯120点のうち編みの技術が見られないか、肩部が編みによらないもの27点（資料番号114・115・121・1325・1326・1329・1330・1334、H06-157、H05-R108-01・02、H05-R109-07・08、H05-R110-04・06・09、H05-R111-06～08、H05-R114-01～5、H10-51-18-06～08、H26-32）、破損が著しいもの1点（同121）を除いた92点を分析対象とする。そのうち収集年代・収集地ともに明らかなもの、ないし推測が可能なものは7点（7.6%）である。

北海道博物館所蔵資料

北海道博物館が収蔵する刀帯の多くは、前身である旧北海道開拓記念館の開館準備にともない1970～1974年に収集された資料からなり、開館後に収集された資料がこれに加わる。

北海道庁文書課資料室から北海道百年記念事業事務局へ引き継がれた「旧拓殖館資料」（北海道開拓記念館2003）には、2点の刀帯が含まれており（資料番号11468・11469）、収集年代は明治～大正期と推定される。N.G.マンローの収集資料とされるもの1点は（同27147）、マンローの死去した1942年以前に収集されたものと推定されている（出利葉 2002）⁽¹⁸⁾。

そのほかに、札幌市在住の個人から寄贈されたもので、旧所有者が1930年に平取町二風谷で収集したとのメモを伴うものがある（同106008）。

また、恵庭市の個人から寄託された資料として、ビニール紐を経糸に用いた特異な資料が含まれている。この資料は、長沼町出身で恵庭市に居住した男性が着用している写真が残されている（北海道教育委員会1991b：19）。着用者の男性は、白老町の現アイヌ民族博物館に勤務した経験があり、各地から集まった人物と

(12) 4238は旭川市博物館（2000）では収集年の記載がないが、市立旭川郷土博物館（1975）で1943年とされているためそれに従った。

(13) 7376は未製品であり、製作過程を示すものとして図3に一部を提示した。

(14) 旭川市博物館（2000）では、4218として4217の写真が重複して提示されている。

(15) 三上は児玉収集の刀帯を245点としている（三上 1968：29）。現在、児玉資料は財団法人アイヌ民族博物館が所蔵するもの149点、市立函館博物館所蔵資料98点、総数は247点である。

(16) この資料はコレクションが紹介された当時は不明とされていたが（大矢・大野 2013）、その後、受入当時の新聞記事掲載写真から同定されたことを大矢京石氏よりご教示頂いた。ここに明記して感謝致します。このコレクションにはもう1点の刀帯が含まれるが、こちらは現在も照合されていない。

(17) 市立函館博物館が1979年に刊行した2種の目録では収集地の記載に齟齬があるが（市立函館博物館 1979a、1979b）、ここでは馬場コレクションの目録（市立函館博物館 1979a）に従った。

(18) 資料はマンローの死後、鷹部屋福平の管理を経ている。鷹部屋自身がアイヌ文化の研究を進めていたことから、現在に至る過程で二者の収集資料が混在している可能性は否定できない。

交流する環境にあったことから、勤務先で他地域出身の人物が製作したものを入手し、生活地に持ち帰った可能性も想定しておく必要がある。

購入資料としては、室蘭市や小樽市、北見市の収集家や古物商を通じて購入された資料が41点あるものの、いずれも背景情報は付属していない。最多の21点を占める近藤幸吉コレクションについては、出利葉浩司による解説があり、浦河町周辺を中心に商いを営んだ人物を通じて購入された可能性が指摘されているものの（出利葉 1997）、伝聞であることから慎重な取り扱いが必要となる。

最も新しい資料は「北海道観光物産興社コレクション」の3点（同126406・126407・126408）で、平取町で土産物店を営んだ男性から北海道観光物産興社が1980年頃に購入した資料を中心とし、1993年に収蔵された（北海道開拓記念館 1998）。

本稿では、53点のうち編みの技術が見られないもの10点（同23105・23018・23113・23117・23120・23121・23494・33298・33300・45674）を除いた43点を分析対象とする。そのうち収集年代・収集地ともに明らかなものは2点（4.6%）である。

二風谷アイヌ文化博物館

二風谷アイヌ文化博物館に所蔵される資料のうち、妻沼浩史収集資料を対象とした。妻沼が主に戦後に収集したものが1997年に収蔵されたもので、刀通しや房に顕著な補修痕跡⁽¹⁹⁾が認められる資料が多数含まれる。

本稿では、編みの技術が見られないものと経過観察のため詳細な観察が困難だったもの各1点を除き、32点を対象とする。全ての資料の背景情報が欠落しているが、最も新しい収集年代の資料として分析対象に加えた。

4 分類の提示

(1) 製作技術の概要

属性の設定にさきだって、理解を助けるため、これまでに公表されている旭川市、浦河町、新ひだか町静内、平取町二風谷での調査記録（岡村 1962；財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1987、1992；静内町教育委員会 1997；財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2007）にもとづいて、製作技術の概要を簡単にまとめる。

編み具

刀帯の製作に使用される編み具は、経糸固定具（図3：1）と、緯糸巻具（図3：2）のみで、準備した経糸は、別に用意した紐を用いて経糸固定具に縛りつける（図3：4）⁽²⁰⁾。

経糸固定具は1本のみの場合と、2本の棒で経糸を挟み込む場合がある。緯糸巻具は、現在では1箇所穿孔を施した木製のへう状工具（図3：2）が多く用いられているが（旭川・浦河）、布を二つ折りにした簡易なものも使用されている（新ひだか町静内）。

編みの姿勢

緯糸にはシナの樹皮や木綿糸が用いられ、2本をもじり編みする点はいずれの記録でも共通し、緯糸を編み込む際の姿勢に差異が認められる（図4：1・2）。また、手のみで2本の緯糸を編み込んでいく方法と（旭川・浦河）、手と歯を用いる方法（平取・新ひだか町静内）が記録されている。

編みの方向

編みの方向は、浦河町や新ひだか町静内、平取町での記録では肩部中央から編み始めて両側の胴部に向かって編み下ろしていくのに対し、旭川市の記録では、胴部→肩部→胴部と1方向に編み進める方法をとる。

編みと織り

本稿で対象とする技術は、編みに含められることが多いものの、近年では織りに含める見解も提示されている状況にある。

この技術は、アイヌ語沙流方言、十勝本別方言、静内方言でoske「～を編む」（他動詞）、ioske「編み物をする」（自動詞）などの語彙が記録されており、従来、「編み」の訳語が当てられてきた（北海道教育委員会 1988；田村 1996；奥田編 1999）。また、現在でも多くの製作者が日本語で「編み」と言い習わしている。

アイヌ語の動詞、および慣用的な日本語の指し示す範囲が、技術論的観点による分類の日本語名称と一致しないことは自明であるが、多様な技術を「編み」か「織り」という二つのカテゴリーに振り分けることは本稿の目的ではない。ここでは基本的に、従来の「編み」の用語に従うこととする。

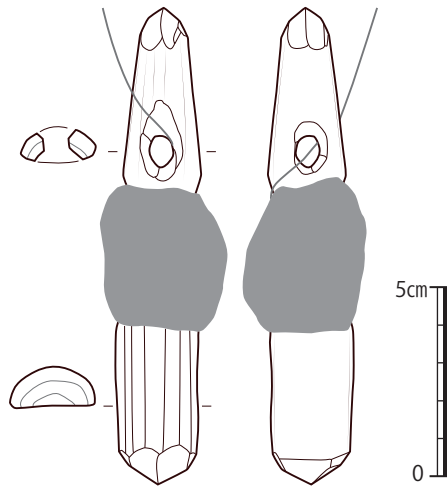
なお、刀帯と同様の技術が用いられる荷縄の製作過程

(19) ここでいう補修は、伝統的な手法によるものではなく、収集家が資料の形態を保つためなどの目的で加えた可能性が高いものを含む。

(20) 図3：4は経糸の両端が撚りをかけないまま、まとめられている。これは、荷縄を製作する場合に経糸の太さと本数を調整する必要があるためにとられる方法であり、本資料は荷縄の製作過程を示すものと考えられる。ただし、刀帯の製作にも同様の編み具を用いることから、参考としてここで図示した。



1 経糸固定具（旭川市博物館 7376 の一部）



2a 緯糸巻具（旭川市博物館 7376 の一部）

図3 経糸固定具と緯糸巻具

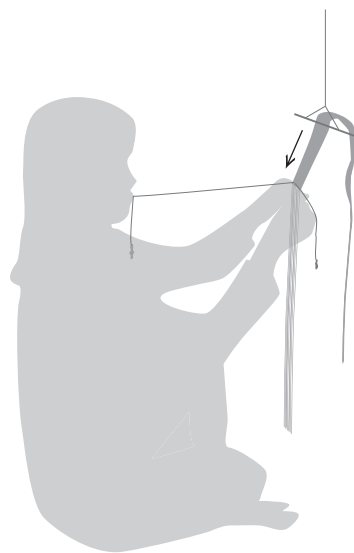


2b

3

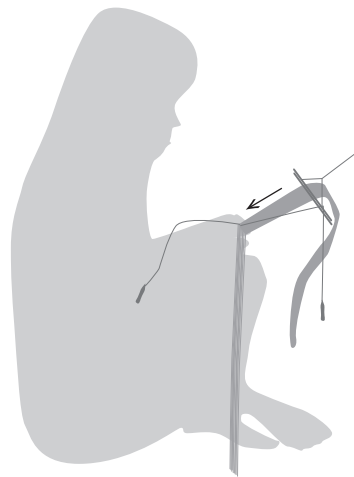


4 杉山（1940）掲載の編み具

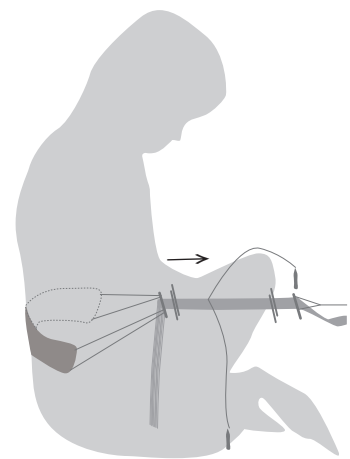


1 一箇所固定型（浦河町・新ひだか町静内・平取町）

※図中の矢印は編みの進行方向を示す



2 一箇所固定型（旭川市）



3 二箇所固定型（平取町）

図4 現在用いられている編み具と作業姿勢

として、現在、平取町二風谷で行われている手法（図4：3）も紹介されており（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2007）、筆者が2016年におこなった調査では、刀帯も同様の技術で製作される事例があることを確認している。

この技術は、前後2箇所経糸を固定するもので、経

糸を強く緊張させることが可能な点でそのほかの記録と大きく異なっており、また、作業の進行方向も製作者の体の側を起点とし、その他の技術とは反対となる。分類基準の設定次第では、この技術のみを織りに含めるという立場もあり得るだろう。

もっとも、岡村による平取町二風谷での聞き取りから

(21) 平取町周辺で収集された荷縄の未成品のうち、編み具が伴うものは、1901～1915年の間に収集された4点の存在が知られており、いずれも1本ないし2本の経糸固定具を用いて1箇所を固定するものである（ペンシルバニア大学考古学人類学博物館ヒラーコレクション：A414 1901年平取町収集・L-122-18 1909年平取町収集、ブルックリン美術館：12744 1910年平取町収集、スウェーデン民族学博物館：1915.14.71 1915年頃平取町収集）。

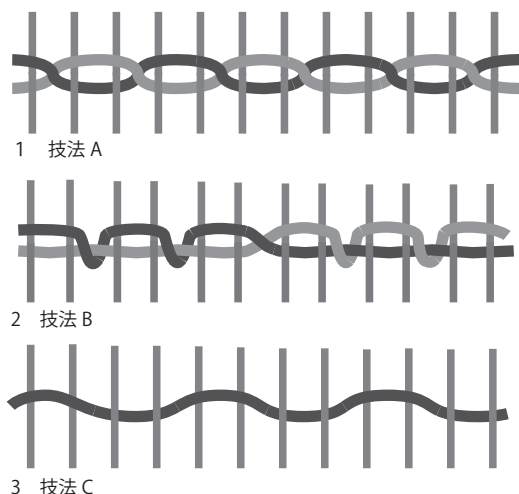


図5 編みの技法の分類（模式図）

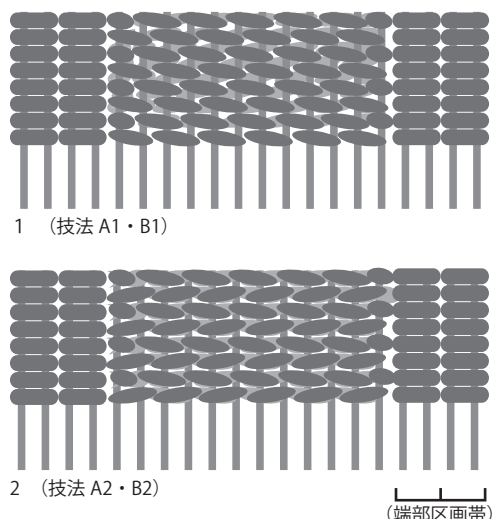


図6 緯糸の交差方向の違いによる分類（模式図）

は、20世紀初頭までは、そのほかの地域と同様に一箇所固定型（図4：1）の製作技術が用いられていたことが読み取れ（岡村 1962：36）、複数の製作過程を示す資料からもこれが裏付けられる⁽²¹⁾。平取町二風谷でアイヌ文化伝承活動に多大な功績を残した萱野茂の著作によれば、1978年に国立民族学博物館から民具製作の依頼を受けた際に、刀帯や荷縄の製作技術は伝承が途絶えていたため、実物資料を解体して製作技術が復元された（萱野 1980：195-196）。二箇所固定型の技術は、1970年代後半の技術復元の過程で、新たに確立されたものと判断できる。

以上の点から、本稿では刀帯、荷縄の製作技術を基本的に編みと呼び、近年では一部に織りに分類される可能性がある技術が用いられているという立場をとることとする。

（2）属性の設定

経糸

経糸の数は、肩部と胴部のそれぞれについて計数する。一部の資料で、肩部と胴部の中で変異が認められる場合があるため、その場合には最多の数を記載する。刀帯の前後（図2）で経糸の数が違う場合には、「前／後」で示す。端部区画帯（図6）では2本の経糸を緯糸でまとめる場合と、太い経糸1本を用いる場合があるが、同じ資料の中で両方の手法が用いられる場合もあるため、確認できないものは全て2本として扱い、破損部などから確認できた場合には[]内に実数を示すこととした。

緯糸の編みの技法

緯糸の編みの技法（図5～8）は以下の技法A1～Eに7分類する。

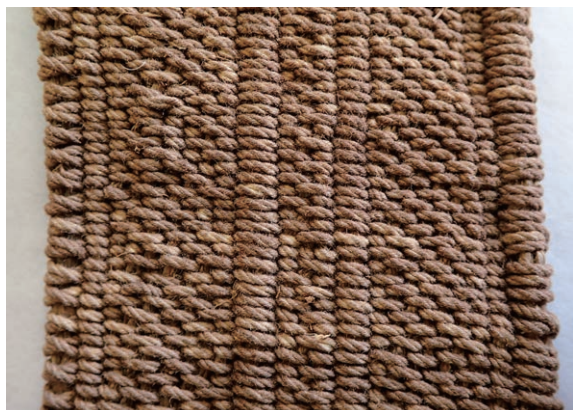
技法A1・A2

経糸に対して2本の緯糸をもじり編みするもので、経糸と緯糸の交差構造は吉本のいう「ヨコもじり型」（吉本編 2013：19）をなす。多くの例で経糸2本を1単位とし、0.5単位毎の変異を加えることで様々なバリエーションが編み出される。緯糸の交差方向の変異から2細分する。

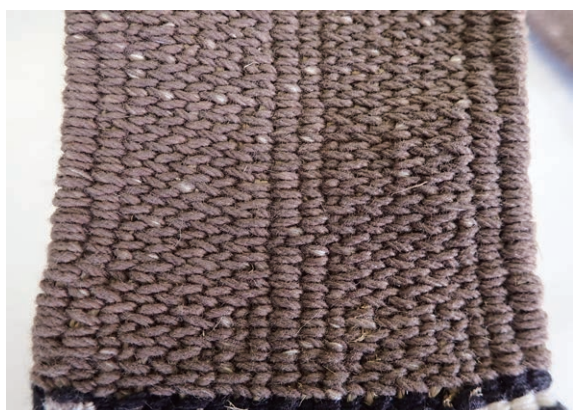
ある段を製作者から見て左から右に編みすすむ場合、裏側から表側に出る緯糸を先、表側から裏側にまわる緯糸を後に編むことで、やや右下がりの編み目が現れる。続いて、次の段を右から左へ編みすすむ際に、表側から裏側に出る緯糸を先、裏側から表側にまわる緯糸を後に編むと、前の段と同様、編み目はやや右下がりとなる。このようにして編みすすめ、段の傾きが一方に揃うものを「技法A1」（図6：1、図7：1）とする。

ある段を左から右へ、編み目はやや右下がりとなるように編んだのち、次の段を右から左へ編みすすむ際に、裏側から表側に出る緯糸を先、裏側から表側に出る緯糸を後に編むと⁽²²⁾、前の段とは逆に、編み目がやや左下がりとなる。これを繰り返して一段毎に編み目が食い違い、綾杉状をなすものを技法「A2」（図6：2、図7：2）とする。

(22) 技法Aは1段毎に裏表を入れ替えながら作業することも可能で、その場合には作業の方向は全ての段で一定方向となる。



1 技法 A1 (旭川市博物館 7371)



2 技法 A2 (旭川市博物館 7091)



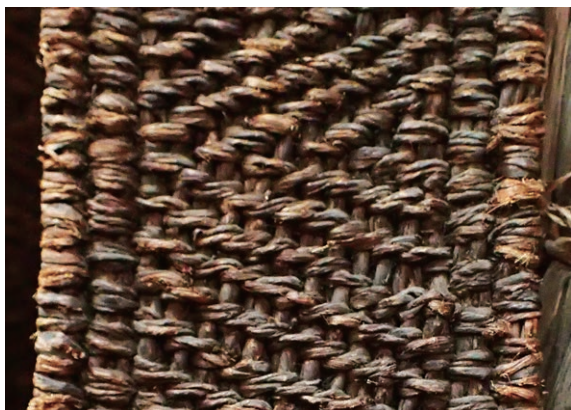
3 技法 B1 (市立函館博物館 H05-R108-04)



4 技法 B2 (二風谷アイヌ文化博物館 KT099-230-1)



図7 編みの技法 (1) 技法A・B



1 技法 C (北大植物園・博物館 9653)



参考資料 技法 C 復元標本 (筆者作成)



2 技法 C (北海道博物館 33302)



3 技法 D (北大植物園・博物館 9646)



4 技法 E (市立函館博物館 H05-R107-03)



図8 編みの技法 (2) 技法C・D・E

技法B1・B2

2本の緯糸をもじり編みするもので、経糸と緯糸の交差構造は吉本のいう「ヨコモじり型」(吉本編 2013: 19)をなす。表裏の緯糸を入れ替えない状態で編みすすめる部分を含む点が技法Aと異なる。表裏の緯糸を入れ替える場所を変異させることで様々なバリエーションの文様を編み出すことが可能になる。

技法Aと同様、段単位の交差方向の変異から技法B1と技法B2に細分する(図7: 3-4)⁽²³⁾。

技法C

緯糸1本を経糸2本を1単位として絡み合わせるもので、経糸と緯糸の交差構造は吉本のいう「タテ・ヨコ直交型」(吉本編 2013: 18)をなす。一段毎に0.5単位ずらすことで、斜行する編み目を作り出すことが可能で、それを組み合わせて綾杉文状、重菱文状の編み目としたものがある⁽²⁴⁾。間隔を広くとる例と(図8: 1)、狭いものがある(図8: 2)。

この技法は従来、刀帯の製作技術として報告されていないため、参考として筆者が技術復元を目的として製作した標本を図示する(図8: 参考資料)。本稿の対象資料では3点が該当する。

技法D

緯糸と経糸の別が無く、直接平編みしたもの。本稿の対象資料の中では2点が該当する。なお、北大植物園・博物館所蔵資料(図8: 3)については、既に津田命子が精緻な復元製作を通じ、36本の糸を用いた「組紐」であることを明らかにしている(津田 2003)。

技法E

経糸と緯糸の交差構造は「タテ・ヨコ直交型」(吉本編 2013: 19)で、帯作りと同様に、小型の織り機を用いて製作された可能性が考えられる。写真図版を提示した資料(図8: 4)は、肩部のみ技法Eで製作されており、文様部の経糸は36本となり、経糸本数が変化する移行部には技法A1、文様部には技法B1が用いられている⁽²⁵⁾。

肩部・胴部に異なった技法が用いられた資料が多数認められることから、肩部／胴部の組み合わせを基準に、以下のa～hの8分類をおこなう。

表1 編みの技法による分類項目の設定

属性名称	編みの技法(肩部／胴部)
a	A1／A1
b	A1／B1
c	B1／B1
d	C／B1
e	D／B1
f	E／B1
g	A2／B2
h	B2／B2

緯糸素材

緯糸素材は、鞆皮糸、「赤獣毛」、木綿糸が認められる。肩部と胴部に用いられる素材の組み合わせから1～6に分類する。なお、肩部および胴部の上端部・下端部に、部分的に異なった素材が用いられる場合があるが、これらは例外として除外した。

表2 素材の組み合わせによる分類項目の設定

属性名称	素材(肩部／胴部)
1	鞆皮／鞆皮
2	鞆皮／鞆皮+赤獣毛
3	鞆皮／鞆皮+赤獣毛+木綿
4	鞆皮／鞆皮+木綿
5	鞆皮／木綿
6	木綿／木綿

胴部が「鞆皮+木綿」となる4の中には、紺の木綿糸と鞆皮繊維を組み合わせたものや、紺・白の木綿糸と鞆皮繊維を組み合わせたものがあるが、それらの立ち入った細分はおこなわないこととし、備考欄に記した。

なお、鞆皮繊維としてオヒョウ、シナノキ、ツルウメモドキなどの樹木、エゾイラクサ、ムカゴイラクサなどの草本が用いられることが知られており、肉眼観察での同定も盛んに行われている。ただし、採取した鞆皮は処理の方法によって異なる種の繊維が類似した外見を呈する例があるため、本稿では、エゾイラクサないしムカゴイラクサと判断できるものを「イラクサ」と記載するほかは積極的な同定を行わない。

刀通し

刀通しは形状から5細分する(図9)⁽²⁶⁾。

I 「裏別布」

編んだ文様部などの裏側に木綿布などを縫い付け刀通しとしたもの。

II 「表別布」

経糸を裏側にまとめ、表側に木綿布などを縫い付け

(23) 技法A1・B1ともに、本文と逆の手順をとった場合には編み目は左下がりになるが、資料の大部分は編み目が右下がりをなし(図7: 1・3)、左下がりとなるものは本稿の分析対象には1点のみ(図11: 10)と、極めて稀である。

(24) 杉山が示した図版には、本稿の技法Cによって様々なパターンの文様を編み出した事例が掲載されている(杉山 1942: 図版六九・1～3)。

(25) 本文中で記したとおり、技法Eは織機を用いて製作された可能性が高いが、該当する資料は文様部を編みで製作しているため、便宜的に検討対象に含めた。

(26) 「表別布」が破損して「別作」に作り替えられたとみられる例も存在することから、分類にあたって注意を要する。

表3 属性分析表 (1)

	収蔵機関 (対象点数/総点数)	分類	資料番号	収集地	所蔵/製作	収集年	編み (肩部/胴部)								素材 (肩部/胴部)					
							A1/AI	AI/B1	B1/B1	C/B1	D/B1	E/B1	A2/B2	B2/B2	靱皮/靱皮	靱皮/靱皮 +赤黴毛	靱皮/靱皮 +赤黴毛+木綿	靱皮/靱皮 +木綿	靱皮/木綿	木綿/木綿
							a	b	c	d	e	f	g	h	1	2	3	4	5	6
1	北大植物園・博物館 (27/32)	I b2類	9645	沙流		1884年		○								○				
2			11018	沙流		1884年		○								○				
3			11020	新十津川	K.K	1936年		○								○				
4			11026	新十津川	K.K			○								○				
5			10981					○								○				
6			11019					○								○				
7			11022					○								○				
8			11023					○								○				
9			11025					○								○				
10			11041					○								○				
11			32931					○								○				
12			32933					○								○				
13		I b4類	11017	旭川近文				○										○		
14			9648					○										○		
15			9657					○										○		
16			9843					○										○		
17			11021					○										○		
18			11042					○										○		
19			11043					○										○		
20		I b5類	9478	新冠		1958年		○											○	
21			9644					○											○	
22			9658					○											○	
23			9660					○											○	
24			10630					○											○	
25			10976					○											○	
26		I d5類	9653	沙流						○									○	
27		I e5類	9646	新冠							○								○	
28	旭川市博物館 (47/79)	I a1類	4222				○								○					
29		I b2類	4234	千歳	I.A	1931年		○								○				
30			4237	落帆		1943年		○								○				
31			7113	旭川				○								○				
32			4239					○								○				
33			4184					○								○				
34			4233					○								○				
35			7114					○								○				
36		I b4類	492	旭川	M.N	1953年		○										○		
37			4189	千歳	I.A	1931年		○										○		
38			4238	落帆		1943年		○										○		
39			4236					○										○		
40			491					○										○		
41			4192					○										○		
42			4195					○										○		
43			4213					○										○		
44			4216					○										○		
45			4217					○										○		
46			4228					○										○		
47			4242					○										○		
48			7489					○										○		
49		I b5類	4181					○											○	
50			4182					○											○	
51			4183					○											○	
52			4188					○											○	
53			4190					○											○	
54			4191					○											○	
55			4194					○											○	
56			4196					○											○	
57			4197					○											○	
58			4198					○											○	
59			4205					○											○	
60			4206					○											○	
61			4207					○											○	
62			4214					○											○	
63			4202					○											○	
64			4224					○											○	
65			4235					○											○	
66			4241					○											○	
67			7111					○											○	

経糸本数		刀通し					房位置		備 考
肩部	胴部	裏別布	表別布	表裏	折曲	別作	中央	偏	
		I	II	III	IV	V			
40	46	○					○		胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
34	40	○					○		胴部緯糸：靱皮+赤獣毛
42	46	○						○	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
40	44	○					○		胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
40	44	○					○		胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
40	44	○						－	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
40	46	○						○	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
－	42	○						○	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛、破損が激しく経糸本数不明
42	46					○		－	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛、房の破損が著しく布片のみ
－	46			－				－	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
－	46	○						○	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
－				－				－	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛、破損が激しく経糸本数不明
22	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+靱皮
16	24		○				○		胴部緯糸：紺木綿+イラクサ、房が刀通しを兼ねる
24	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+靱皮
32	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿/一部黒染靱皮+靱皮/一部白木綿
36	42		○					○	胴部緯糸：紺木綿+靱皮
32	50	○					○		胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+緑木綿+靱皮
24	48		○				○		胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+緑木綿+靱皮
36	42		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
26	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿
24	42		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
22	30					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
24	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿
32	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
20	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、無文部斜行編み
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿
32	32					○		－	炭化物付着著しく観察困難
36	46	○							胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛、刀通し背部に毛皮を用いる
42	46	○					○		刀通し裏は動物の皮革を用いる
36	40	○					○		胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛、収集地旭川とされるが経緯不明
38	44		○				○		胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ+赤獣毛、収集地情報（サハリン）は特徴による推定の可能性あり
36	46	○					○		胴部緯糸：靱皮+赤獣毛、刀通し裏に皮革を用いる、収集地情報（北海道）は特徴による推定の可能性あり
－	46	○					○		胴部緯糸：靱皮+赤獣毛、破損激しい、房2枚付属
40	44	○						－	胴部緯糸：靱皮+赤獣毛
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿/黒染靱皮+白木綿/靱皮
33	38/41	○						－	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+イラクサ、イラクサは撚りをかけない
40	60					○	○		胴部緯糸：イラクサ+橙染イラクサ+赤染イラクサ+紺木綿+赤木綿？、房裏に魚皮使用
40	58	○					○		胴部緯糸：イラクサ+橙染イラクサ+赤染イラクサ+紺木綿、刀通し裏及び房裏に魚皮使用、収集地情報（サハリン）は特徴による推定の可能性あり
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+イラクサ
30	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+靱皮
36	40			○				－	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+イラクサ、一方はイラクサではなく白木綿
36	52			－				－	胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ+木綿、4242に酷似
26	36		○					－	胴部緯糸：紺木綿/黒染靱皮+白木綿+靱皮
－	36					○	○		胴部緯糸：紺木綿/黒染靱皮+靱皮、刀通し上部を木綿布で延長。
24	36		○					○	胴部緯糸：[上半]靱皮+黒染靱皮+赤木綿、[下半]靱皮+紺木綿+赤木綿
36	44		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+イラクサ、4213に酷似
28	36	○						－	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+イラクサ
30	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
20	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
24	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
26	36					○	○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿、濶に木綿糸の束を縫い付ける
26	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿？、赤木綿は激しく退色
20	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
36	40			－				－	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、一部の白を編み後に赤く染色
26	32		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
22	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、無文部横糸黒染靱皮+靱皮で連続山形文
30	48	○					○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿、二風谷アイヌ文化博物館KT99-228-1に類似
20	36			－				－	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+白木綿
28	36			○				－	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
20	36		○					－	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
29	36					○	○		胴部緯糸：紺・白木綿、一部の白を編みの後に赤く染色
30	36	○					○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿？、三色編みの手法が2種混在
26	36		○					－	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、片側欠損
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+白木綿
36	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿
30	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿

表3 属性分析表 (2)

	収蔵機関 (対象点数/総点数)	分類	資料番号	収集地	所蔵/製作	収集年	編み (肩部/胴部)								素材 (肩部/胴部)					
							A1/A1	A1/B1	B1/B1	C/B1	D/B1	E/B1	A2/B2	B2/B2	靱皮/靱皮	靱皮/靱皮 +赤黴毛	靱皮/靱皮 +赤黴毛	靱皮/靱皮 +木綿	靱皮/木綿	木綿/木綿
							a	b	c	d	e	f	g	h	1	2	3	4	5	6
68	旭川市博物館 (47/79)	I b6類	7371	旭川	O.K蔵/S.K作			○												○
69			4215					○												○
70			4225					○												○
71		I c5類	4212						○										○	
72			7110	旭川	M.N	1953年			○										○	
73			4226						○										○	
74		I g6類	7091	旭川	S.F作								○							○
75	市立函館博物館 (92/120)	I b1類	民族1327	多蘭泊		1930~40年代		○							○					
76			H05-R105-01					○							○					
77			H05-R105-02					○							○					
78			H05-R105-05					○							○					
79			H05-R105-06					○							○					
80			H05-R108-08					○							○					
81		I b2類	民族1328	登富津		1930~40年代		○								○				
82			民族1331	登富津		1930~40年代		○								○				
83			H05-R105-04					○								○				
84			H05-R105-08					○								○				
85			H05-R109-01					○								○				
86			H05-R109-02					○								○				
87		I b3類	H05-R105-07					○									○			
88		I b4類	民族116					○										○		
89			H05-R104-01	二風谷				○										○		
90			H05-R104-02					○										○		
91			H05-R104-03					○										○		
92			H05-R104-05					○										○		
93			H05-R104-06					○										○		
94			H05-R104-07					○										○		
95			H05-R104-08					○										○		
96			H05-R105-03					○										○		
97			H05-R106-01					○										○		
98			H05-R106-04					○										○		
99			H05-R106-05					○										○		
100			H05-R106-06					○										○		
101			H05-R106-07					○										○		
102			H05-R107-01					○										○		
103			H05-R107-02					○										○		
104			H05-R108-03					○										○		
105			H05-R108-06					○										○		
106			H05-R109-05					○										○		
107			H05-R109-06					○										○		
108			H05-R111-05					○										○		
109			H05-R112-03					○										○		
110			H05-R113-04					○										○		
111			H05-R113-06					○										○		
112			H05-R113-08					○										○		
113			H10-51-18-01					○										○		
114			H10-51-18-05					○										○		

経糸本数		刀通し					房位置		備 考
肩部	胴部	裏別布 I	表別布 II	表裏 III	折曲 IV	別作 V	中央	偏	
25/28	36[34]/38[36]					○	○		胴部緯糸：灰木綿+白木綿、無文部は鞆皮に近い色に染色
36	44		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿？
30	40	○						○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
24	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿、無文部は黒染鞆皮+鞆皮で連続山形文
28	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿、全体に文様が組み入れられた事例、4226に類似
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、全体に文様が施される事例、7110に類似
32	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
24	46	○					○		胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ+赤染イラクサ、房裏面に魚皮
30	42	○					○		胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ？、横帯の一部に紺木綿糸使用
40	44		○					○	胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ+赤染イラクサ、横帯に一部木綿糸使用
22	32	○						○	胴部緯糸：イラクサ+赤染イラクサ
22	36	—					—		胴部緯糸：黒染鞆皮+鞆皮
22	28		○				○		胴部緯糸：鞆皮+黒染鞆皮
40	44	○					○		胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ+赤獣毛、刀通し裏面に魚皮
34	48	○					○		胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛
38	46	○					—		胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ+赤獣毛
40？	44	○					—		胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ+赤獣毛
42	46	○						○	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛、刀通し一方が破損
30	44					○	○		胴部緯糸：イラクサ+黒染イラクサ+赤獣毛
36	40		○				—		胴部緯糸：紺木綿+赤獣毛+イラクサ
36	38		○					○	胴部緯糸：紺木綿+イラクサ
28	36					○	○		胴部緯糸：紺木綿+イラクサ
30	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+イラクサ
22	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+イラクサ
22	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+鞆皮
22[18]	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+鞆皮
36	38		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+鞆皮
34	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+鞆皮
30	36	○					○		胴部緯糸：紺木綿+鞆皮
22	28		○				○		胴部緯糸：紺木綿+イラクサ
32	36					○		○	胴部緯糸：前) 紺木綿+白木綿、後) 黒染イラクサ+白木綿
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+鞆皮
35	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+イラクサ
22	38		○				—		胴部緯糸：紺木綿+鞆皮
22	36		○				—		胴部緯糸：紺木綿+鞆皮
26	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿/鞆皮、前部下半のみ緯糸に鞆皮を使用
36	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿、黒染鞆皮+鞆皮、
36	34	○						○	胴部経糸：紺木綿+白木綿+一部に鞆皮
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+鞆皮
23	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+鞆皮
36	38		○					○	胴部緯糸：紺木綿+鞆皮
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+鞆皮
28	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿/黒染鞆皮+白木綿
32	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+鞆皮
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿/鞆皮
28	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+緑木綿+イラクサ
30	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+鞆皮+赤木綿

表3 属性分析表 (3)

	収蔵機関 (対象点数/総点数)	分類	資料番号	収集地	所蔵/製作	収集年	編み (肩部/胴部)								素材 (肩部/胴部)					
							A1/AI	A1/B1	B1/B1	C/B1	D/B1	E/B1	A2/B2	B2/B2	靱皮/靱皮	靱皮/靱皮 +赤黴毛	靱皮/靱皮 +赤黴毛	靱皮/靱皮 +木綿	靱皮/木綿	木綿/木綿
							a	b	c	d	e	f	g	h	1	2	3	4	5	6
115	市立函館博物館 (92/120)	I b5類	民族118	八雲	S.T	1958年		○											○	
116			民族1332	鶴川		1930~40年代		○											○	
117			民族1333	鶴川		1930~40年代		○											○	
118			民族1335	鶴川		1930~40年代		○											○	
119			民族117					○											○	
120			民族119					○											○	
121			民族120					○											○	
122			民族806					○											○	
123			H05-R104-04					○											○	
124			H05-R106-02					○											○	
125			H05-R106-03					○											○	
126			H05-R107-04					○											○	
127			H05-R107-05					○											○	
128			H05-R107-06					○											○	
129			H05-R107-07					○											○	
130			H05-R107-08					○											○	
131			H05-R107-09					○											○	
132			H05-R108-04					○											○	
133			H05-R108-05					○											○	
134			H05-R108-07					○											○	
135			H05-R108-09					○											○	
136			H05-R108-10					○											○	
137			H05-R109-03					○											○	
138			H05-R109-04					○											○	
139			H05-R110-01					○											○	
140			H05-R110-02					○											○	
141			H05-R110-03					○											○	
142			H05-R110-05					○											○	
143			H05-R110-07					○											○	
144			H05-R110-08					○											○	
145			H05-R110-11					○											○	
146			H05-R111-01					○											○	
147			H05-R111-02					○											○	
148			H05-R111-03					○											○	
149			H05-R111-04					○											○	
150			H05-R112-01					○											○	
151			H05-R112-02					○											○	
152			H05-R112-04					○											○	
153			H05-R112-05					○											○	
154			H05-R112-06					○											○	
155			H05-R112-07					○											○	
156			H05-R112-08					○											○	
157			H05-R113-01					○											○	
158			H05-R113-02					○											○	
159			H05-R113-03					○											○	
160			H05-R113-05					○											○	
161			H05-R113-07					○											○	
162			H10-51-18-02					○											○	
163			H10-51-18-03					○											○	
164			H10-51-18-04					○											○	
165		I d5類	H05-R110-10							○									○	
166		I f4類	H05-R107-03									○						○		
167	北海道博物館 (43/53)	I a4類	33296				○											○		
168			45669				○											○		
169		I b1類	23112					○							○					
170			33297					○							○					
171		I b2類	23111					○								○				
172			33299					○								○				

経糸本数		刀通し					房位置		備 考	
肩部	胴部	裏別布	表別布	表裏	折曲	別作	中央	偏		
		I	II	III	IV	V				
18	28		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿	
32	40	○						○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿	
24	28		○				○		胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+白木綿	
20	36		○					—	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿	
28	36		○					○	有文部経糸：紺木綿+白木綿/イラクサ+一部赤木綿	
18	30	—						—		文様が不規則
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿	
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿	
22	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
34	38		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
26	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
28	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
34	36	—						—		胴部緯糸：紺木綿+白木綿、無文部を2種のもじり編み
32	42	○					○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿、房は和服帯を素材とする	
36	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
30[24]	40[34]		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
36	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
30	38		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
28	38/38		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
24	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、一部の白木綿を編み上げ後に赤く染めて3色とする	
20	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
22	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
38	36			○				○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+緑木綿	
28	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
28	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
28	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿、上部一部鞆皮	
16	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿	
20	34/36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿	
22	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+緑木綿	
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
24	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
32	32		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、無文部A技法編みが2本おきと4本おき混在	
34	50		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
22	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、前後文様違い	
25	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
20	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
27	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
20	36	○					○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
32	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
22	28		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
32	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿、北海道博物館23110・23115に酷似	
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿	
22	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
22	38		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿	
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+イラクサ/一部白木綿	
28	34		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+鞆皮	
22	28	○						○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+鞆皮	
14	24[20]		○				—		胴部緯糸：黒染鞆皮+鞆皮、無文部の横帯に紺木綿使用、両端の経糸が太い	
30	36		○				○		胴部緯糸：黒染イラクサ+イラクサ、無文部横帯に一部白木綿糸使用	
40	44	○					○		胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛	
36	42		○					○	胴部緯糸：イラクサ+赤獣毛、刀通し及び房は後補	

表3 属性分析表 (4)

	収蔵機関 (対象点数/総点数)	分類	資料番号	収集地	所蔵/製作	収集年	編み (肩部/胴部)								素材 (肩部/胴部)					
							A1/AI	AI/B1	BI/B1	C/B1	D/B1	E/B1	A2/B2	B2/B2	靱皮/靱皮	靱皮/靱皮 +赤黼毛	靱皮/靱皮 +赤黼毛+木綿	靱皮/靱皮 +木綿	靱皮/木綿	木綿/木綿
							a	b	c	d	e	f	g	h	1	2	3	4	5	6
173	北海道博物館 (43/53)	I b4類	106008	二風谷	K	1930年		○										○		
174			23107					○										○		
175			23109					○										○		
176			23116					○										○		
177			23123					○										○		
178			27147					○										○		
179			33303					○										○		
180			33304					○										○		
181			45666					○										○		
182			45672					○										○		
183			45673					○										○		
184		I b5類	11468					○											○	
185			11469					○											○	
186			23103					○											○	
187			23104					○											○	
188			23106					○											○	
189			23110					○											○	
190			23114					○											○	
191			23115					○											○	
192			23117					○											○	
193			23118					○											○	
194			23119					○											○	
195			23122					○											○	
196			32884					○											○	
197			33006					○											○	
198			33295					○											○	
199			33301					○											○	
200			45667					○											○	
201			45668					○											○	
202			45670					○											○	
203			45671					○											○	
204			126406					○											○	
205		I b6類	45675					○												○
206		I d5類	33302							○									○	
207		I g5類	126407										○						○	
208		I g6類	126408										○							○
209		I h6類	96070	恵庭	T	1984年								○						○
210	二風谷 アイヌ文化博物館 (32/34)	I a1類	KT081-01				○								○					
211		I b4類	KT079-01					○										○		
212			KT079-02					○										○		
213			KT079-04					○										○		
214			KT079-05					○										○		
215			KT080-04					○										○		
216			KT99-228-06					○										○		
217		I b5類	KT079-03					○											○	
218			KT080-01					○											○	
219			KT080-03					○											○	
220			KT081-03					○											○	
221			KT080-02					○											○	
222			KT99-228-04					○											○	
223			KT99-228-05					○											○	
224			KT99-231-01					○											○	
225			KT99-231-02					○											○	
226			KT99-231-03					○											○	
227			KT99-231-04					○											○	
228			KT99-232-01					○											○	
229			KT99-232-02					○											○	
230			KT99-232-03					○											○	
231			KT99-228-01					○											○	
232			KT99-228-02					○											○	
233			KT99-228-03					○											○	
234		I b6類	KT99-232-04					○												○
235			KT99-230-02?					○												○
236		I c5類	KT080-05						○										○	
237		I c6類	KT081-02						○											○
238			KT284						○											○
239		I e5類	KT081-04								○								○	
240			KT282								○								○	
241		I g6類	KT99-230-01										○							○

経糸本数		刀通し					房位置		備 考
肩部	胴部	裏別布	表別布	表裏	折曲	別作	中央	偏	
		I	II	III	IV	V			
32	40		○					○	胴部緯糸：黒染靱皮/紺木綿+靱皮+赤木綿
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿？+イラクサ
24	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+イラクサ
36	36					○	○		胴部緯糸：紺木綿+靱皮+白木綿？（赤か？）
28	36					○		○	胴部緯糸：黒染靱皮+靱皮/白木綿+一部赤木綿？、無文部に刺繍、黒塗り
30	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+靱皮+白木綿？（赤か？）
28	28		○				○		胴部緯糸：紺木綿+イラクサ
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿糸+赤木綿糸+イラクサ
36	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+イラクサ+一部赤木綿
22	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+靱皮+白木綿？（赤か？）
30	44	○					○		胴部緯糸：紺木綿+靱皮+赤染靱皮？
25	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
24	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
30	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
34	44		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿
36	36		○					—	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿
32	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿、23115に類似
24	32					○		—	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、小型の宝刀用か
32	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿、23110に類似
30	36	○					○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿
36	36		○			○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、房はⅡの片側が破損しⅤに作り替えたものと見られる
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
22	36	○						○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
30	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
26	36		○					—	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
20	36	○						○	紺木綿+白木綿+赤木綿
12	20					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
28	40		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
26	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
39	38					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
28	28		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、小型
22	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
30	41					○		○	胴部緯糸：灰木綿+白木綿、無文部緯糸麻？
30	39					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、一部に麻？
24	24	○					○		胴部緯糸：青木綿+白木綿、経糸：ビニール紐
16	16	○						—	全体が黒、赤染の靱皮を緯糸とし、文様がない
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+イラクサ、刀通し、房、紐が後補。別資料との組み合わせの可能性あり
36	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+イラクサ
26	34		○					○	胴部緯糸：紺木綿+赤木綿+イラクサ、刀通し、房裏補強布、紐が後補、全体に水洗による劣化
18	28		○					○	胴部緯糸：紺木綿+イラクサ、一部白木綿、刀通しは和更紗を靱皮繊維で切り伏せ、房の刺繍は全て木綿糸
36	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+イラクサ
36	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿、一部靱皮
38	42		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿、刀通し経糸を平編み、刀通し表布及び房裏補強布は後補
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿
—	44		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
24	36	○						○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、片側刀通し以下欠損
30	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿刀通し部木綿布及び紐、房裏補強布は後補
26	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、無文部に一部白木綿を織り込んで斜行文とする
36	44							○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿
26	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿、刀通し、房、紐は後補。
23	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
32	36		○				○		胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿
26	36			○				○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
30	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
22	30		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤絹布片
32	44		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、旭川市博物館4198に類似
28	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、粉石鍔？が付着
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+橙木綿+赤木綿
28	38		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
36	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、展示中、番号札欠
24	36		○					○	刀通し部木綿布及び紐は後補
36	36	○						—	胴部緯糸：紺木綿+白木綿稚拙な編み、房欠損か当初から房を欠くか
36	36					○		○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿
36	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+白木綿+赤木綿、肩部は経糸36本を18本2組に分け編む
28	28			—				—	胴部緯糸：紺木綿+白木綿、無文部は経糸28本を14本2組に分け編む
32	36		○					○	胴部緯糸：紺木綿+緑木綿、ただし緑木綿は水洗いによって紺木綿の色が白木綿に移ったものの可能性あり

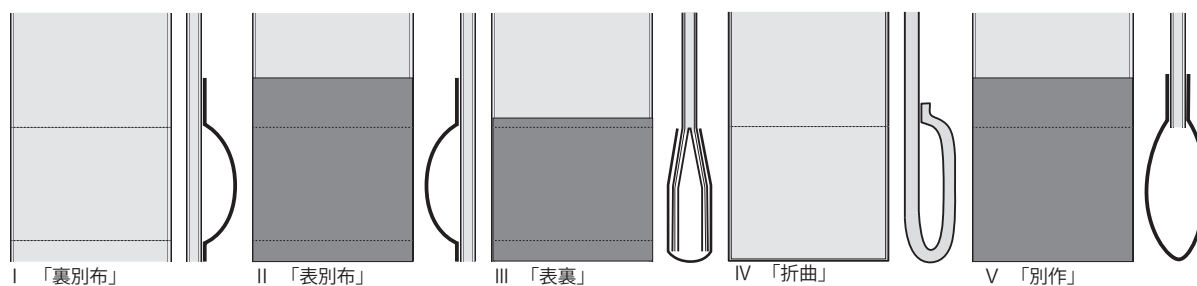


図9 刀通しの分類

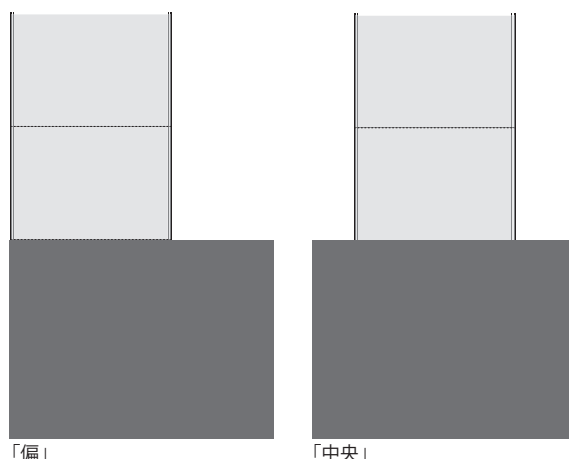


図10 房取付位置の分類

刀通しとしたもの。

III 「表裏」

経糸を表裏に二分し、それぞれを木綿布などで覆い、刀通しとしたもの。

IV 「折曲」

編んだ文様部や、経糸をまとめたものを裏側に向けて折り曲げ、刀通しとしたもの。

V 「別作」

文様部の直下で経糸を切断し、木綿布などで刀通しを作り出すもの。

房位置

房は形状から2細分する（図10）。

「偏」は、刀通し部と房の接する部分を一方の側辺に寄せたもの。房間紐の位置からどちらに偏っているのかを検討することも可能であるが、房間紐が失われたものも多いことから、細分しないこととした。

「中央」は房のほぼ中央に刀通しが位置するもの。

(3) 属性の組み合わせによる分類の提示

刀帯のうち、本稿で対象とする編みの技術によるものをⅠ類、その他をⅡ類と呼称することとし、Ⅰ類について、編みの技術（表1）および素材の組み合わせ（表2）を基準として、対象資料に実在する以下の16細分類

を設定する。

■ Ⅰa1類

全体が技法A1で製作されるもののうち、鞆皮を緯糸素材とするもの。対象資料のうち2点が該当する。

■ Ⅰa4類

全体が技法A1で製作されるもののうち、肩部が鞆皮、胴部が鞆皮と木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち2点が該当する。

■ Ⅰb1類

肩部が技法A1、胴部が技法B1で製作されるもののうち、鞆皮を緯糸素材とするもの。対象資料のうち8点が該当する。

■ Ⅰb2類（図11：1～4）

肩部が技法A1、胴部が技法B1で製作されるもののうち、肩部が鞆皮、胴部が鞆皮と「赤獣毛」を緯糸素材とするもの。対象資料のうち27点が該当する。

■ Ⅰb3類

肩部が技法A1、胴部が技法B1で製作されるもののうち、肩部が鞆皮、胴部が鞆皮と「赤獣毛」および木綿糸

I b2類



1 新十津川 (11026)



2 新十津川/1936年 (11020)



3 沙流/1884年 (11018)



4 沙流/1884年 (9645)

I b4類



5 旭川近文 (11017)



6 (11021)



7 (9657)



8 (9843)

I b5 類



9 新冠/1958年 (9478)



10 (9658)



11 (9644)

I d5 類



12 沙流 (9653)

図11 北大植物園・博物館所蔵刀帯の分類

を緯糸素材とするもの。対象資料のうち1点が該当する。

■ I b4類 (図11: 5~8)

肩部が技法A1、胴部が技法B1で製作されるもののうち、肩部が靱皮、胴部が靱皮と木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち64点が該当する。

■ I b5類 (図11: 9~11)

肩部が技法A1、胴部が技法B1で製作されるもののうち、肩部が靱皮、胴部が木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち113点が該当する。

■ I b6類

肩部が技法A1、胴部が技法B1で製作されるもののうち、肩部・胴部ともに木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち6点が該当する。

■ I c5類

全体が技法B1で製作されるもののうち、肩部が靱皮、胴部が木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち4点が該当する。

■ I c6類

全体が技法B1で製作されるもののうち、肩部・胴部ともに木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち2点が該当する。

■ I d5類 (図11: 12)

肩部が技法C、胴部が技法B1で製作されるもののうち、肩部が靱皮、胴部が木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち3点が該当する。

■ I e5類

肩部が技法D、胴部が技法B1で製作され、肩部が靱皮、胴部が木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち3点が該当する。

■ I f4類

肩部が技法E、胴部が技法B1で製作され、肩部が靱皮、胴部が靱皮と木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち1点が該当する。

■ I g5類

肩部が技法A2、胴部が技法B2で製作されるもののうち、肩部が靱皮、胴部が木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち1点が該当する。

■ I g6類

肩部が技法A2、胴部が技法B2で製作されるもののうち、肩部・胴部ともに木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち3点が該当する。

■ I h6類

全体が技法B2で製作され、肩部・胴部ともに木綿糸を緯糸素材とするもの。対象資料のうち1点が該当する。

対象資料241点のうち、肩部が技法A1、胴部が技法B1によるI b類が219点(90.9%)を占め、その他の技術は極めて稀だということが明らかになった。

特に、I b2類が27点、I b4類が64点、I b5類が113点の計204点となり、3類型のみで全体の84.6%を占め、そのほかの組み合わせは最多のI b6類でも6点(2.4%)と稀である。

以下の分析では、まず資料点数が豊富なI b2類、I b4類、I b5類を重点的な検討対象としたうえで、共時的・通時的に有意な変化を示す可能性がある分類群について適宜言及する。

5 共時的分布と通時的变化

(1) 分布図の作成

前節で検討した分類群の相互の関係を明らかにするため、収集地および収集年代の情報が伴う資料を対象として分布を検討する。

分布図の作成にあたっては、海外研究者による資料収集が活発におこなわれた1880~1910年代と、日本国内の研究者によって多くの資料が収集された1920~1950年代の二時期に区分したものを示す(図12)。

各年代の分布からは、年代に関わらずI b2類が北海道~サハリンにわたって分布していること(図12: 1・2・7・12・14・16・17)、I b5類はサハリンに分布せず、北海道南西部に偏っていることが分かる(図12: 4・5・8~10・18~20・25・26)。

(2) I b2類・I b4類・I b5類の関係

分布圏の重複に関する解釈

北海道内ではI b2類とI b4類、I b5類、サハリンではI b2類とI b4類などが同時期に収集されている。このように、同じ収集年代の中で収集地も重複して複数の分類群が存在している理由としては、A.複数の分類群が同じ年代に製作・使用された場合や、B.各分類群の製作年代が異なるものの使用年代が重複していた場合、C.各分類群が異なった場所で製作され流通によって分布範囲が重複した場合など、様々な可能性が想定され得る。

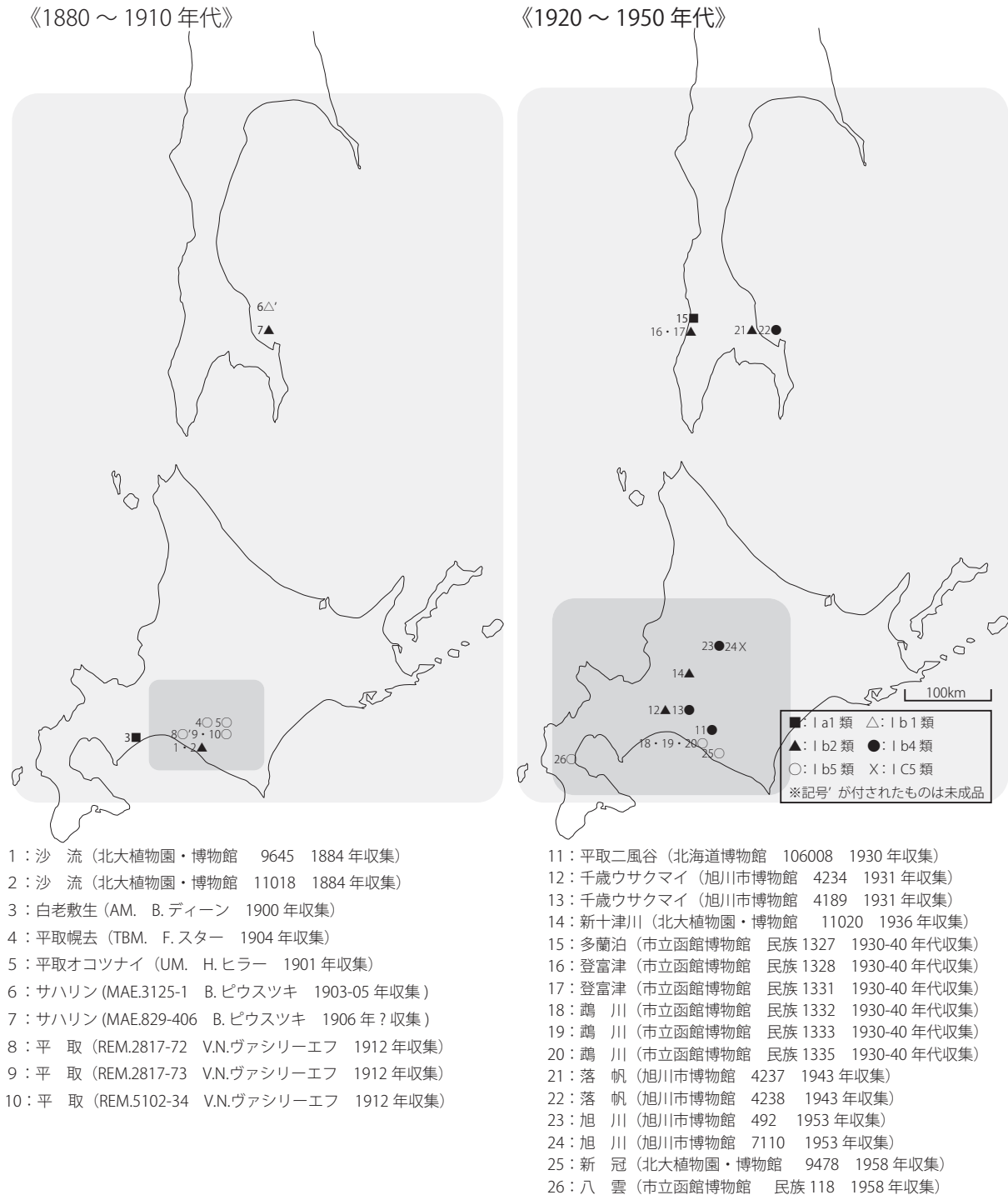


図12 背景情報を有する資料の共時的分布

I b2類とI b4類・I b5類を比較してみると、その違いは素材だけでなく、経糸の本数、刀通しや房の位置(表4)にまで及んでいる。同じ年代に異なる素材を用いて製作されたものとする「A」では、使用する素材によって異なる属性の組み合わせを採用したと考えることになり、やや不自然な解釈となるだろう。

本稿2章で紹介したように、従来からI b2類については、相対的に古い年代のものとする想定や、サハリン方

面を中心に分布するものとする推測が示されてきた。その背景には、先に指摘した経糸の本数などに認められる差異への認識があった可能性がある。先行研究によって示された解釈は、収集年代・収集地が重複している状況を、製作年代が異なるものが使用されていたとする「B」、異なる地域で製作されたものが流通していたとする「C」から説明するものといえる。

刀帯は宝物の一種であり、日常雑器に比べれば使用は

長期間にわたることが予想されることから、使用年代の間に新たな類型が製作されたり、広範囲に流通する可能性を低く見積もることはできない。

とはいえ、実際にはI b2類は北海道内で千歳・沙流・新十津川など広い範囲で収集されているうえ⁽²⁷⁾、資料数の面でもサハリンとの大きな違いは認められない。これらが全てサハリン方面で製作され、北海道へ搬入されたと考える「C」には、積極的な根拠を認めがたい。

文様の系統性

異なった分類群が、同じ地域で異なった年代に製作されたという「B」の可能性を検証するために、文様の変化に系統性が認められるか否かを検討する。

I b2類の多くは全体が茶褐色に変色しているものの(図11:1~4、図13:1、図14:1~3)、一部の資料で変色する前の文様構成を確認できる(図14:4)。これを参考にして変色した資料を観察すると、胴部は技法Bで編まれており、表裏の緯糸の変換点が鞆皮を素材とする部分の中にも認められることから、今回検討した全ての資料が、本来は「赤獣毛」と黒く染色した鞆皮、染色しない鞆皮による3色で編まれていたものと復元できる(図13:1b)。

復元された文様中には、I b4類・I b5類に多用される、三上が「アイウシ亀甲文」と呼んだ文様(図13:3)とほぼ同一の構成を示すものがある。赤獣毛と黒く染色した鞆皮による文様を黒木綿に置き換えることで、I b2類とI b4類・I b5類の文様が連続的に変化した可能性が想定できる(図13)。文様の構成が単純化するの、I b2類からI b4類・I b5類にかけて、経糸の本数が減少することに関係する変化と考えられる。

I b4類・I b5類に見られる文様のうち、浜益などでuokikiri(杉山 1940:79)⁽²⁸⁾の名称が記録されている文様(図14:5)は、I b2類では1段のみで文様の一部に組み込まれた事例が数多く認められる(図14:1・2)。こうした共通する文様の存在も、I b2類とI b4類・I

b5類の間に系統的な関係を認める根拠となるだろう。

その他の属性の差異

I b2類・I b4類・I b5類について、刀通しの形態、房位置が判別できるものを対象として、属性出現率を比較する(表4)。

結果を見てみると、I b2類では刀通し「I」が84.0%を占めるのに対し、I b5類では「II」が79.6%となり傾向が大きく異なる。房の位置についても、I b2類では「中央」が68.4%に対して、I b5類では「偏」が84.1%に達し、両者の違いは大きい。

ただし、I b4類における属性の出現率を見てみると、刀通しの形態、房の位置が、いずれもI b5類に類似する傾向を示しつつも、I b2類とI b5類のあいだに収まっていることが分かる。これは、I b2類とI b5類が、I b4類を介して連続的に変化した可能性を示すものと考えられる。

変遷案の提示

以上に示した分布の重複、文様に認められる系統性、属性の出現率に見られる連続性を合わせて考えれば、I b2類・I b4類・I b5類の関係は「B.各分類群の製作年代が異なるものの使用年代が重複していた場合」に合致し、連続的に変化したものとするのが妥当だろう。変化の方向性については、I b5類が戦後も旭川で製作された記録が存在することから(財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1987)、

〈古〉I b2類→I b4類→I b5類〈新〉

とすることができる。

この変化は、胴部の緯糸の素材に着目すると、I b2類に多用されていた「赤獣毛」が使用されなくなるとともに木綿糸の使用が始まり、I b4類からI b5類にかけて木綿糸の使用比率が高まっていくというものとなっている。

なお、既に見たように、I b2類とそれ以降は属性の

表4 刀通しと房の形態

	刀通し					房位置	
	I	II	III	IV	V	中央	偏
I b2類	21 (84%)	2 (8%)	0	0	2 (8%)	13 (68.4%)	6 (31.6%)
I b4類	7 (11.1%)	43 (68.2%)	1 (1.6%)	0	12 (19%)	18 (31.5%)	39 (68.4%)
I b5類	9 (8.3%)	86 (79.6%)	1 (0.9%)	0	12 (11.1%)	16 (15.8%)	85 (84.1%)

(27) 松前城資料館が所蔵するピリカ会関係資料の中には、収集地不明なI b2類が1点含まれる(収蔵番号CII005-006)。ピリカ会の資料収集活動は噴火湾沿岸の八雲町落部などを中心におこなわれていたことが指摘されていることから(北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2005)、この資料も周辺で収集された可能性もある。仮にそれが事実であれば、I b2類の分布はアイヌ民族の集落が存在した地域のほぼ南端にまで及んでいたことになる。

(28) 語形はuokikir[u-ok-ikir]と推定され、「互い-〜にひっかかる-列」を語源とするものと見られるが、ここでは杉山の表記を転記した。その意味は、杉山が金田一京助、久保寺逸彦の教示として示したように、入組部を示すものと考えられる(杉山 1940:79)。

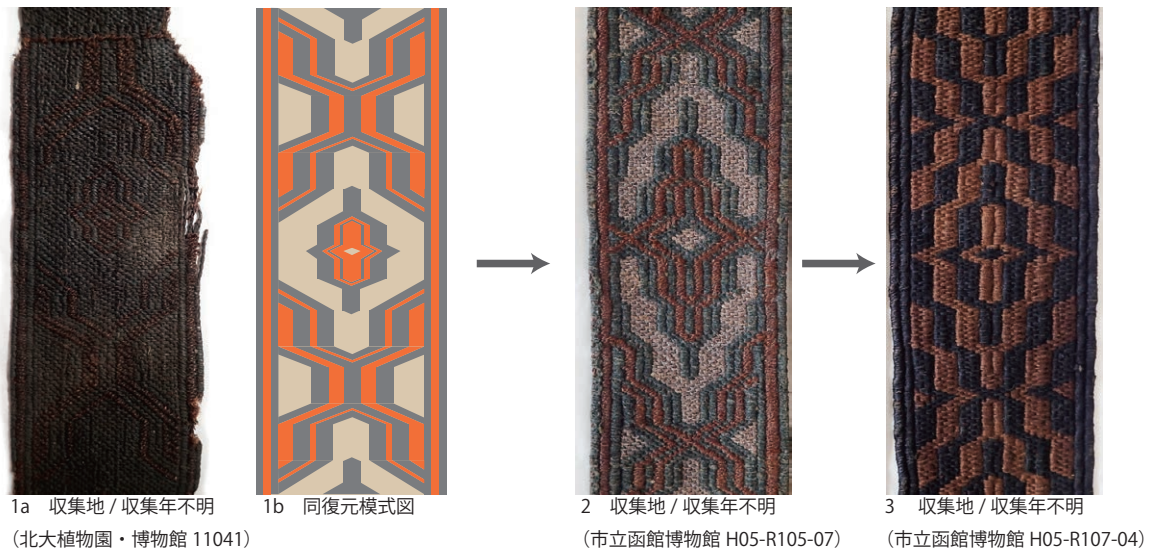


図13 Ib2類 (1) から Ib3類 (2)・Ib5類 (3) に見られる文様の系統的変化



図14 Ib2類 (1~4) から後出類型 (5~8) への変化にみられる北海道とサハリンの差異

違いが大きいという、中間的な属性を示す I b3類は極めて稀であり、その製作年代には大きな重なりを想定する必要はないものと考え、I b4類と I b5類は素材以外の属性の共通性が高く、製作年代そのものも大きく重複していた可能性は否定できない。つまり、ここでの変遷案は、各類型の製作年代が完全に排他的な関係であったとみなすものではなく、各類型を年代学的に等価な単位とは見なすこともできない性質のものと考えておきたい。

I b2類の製作・使用年代の上限

これまでの検討の結果から、I b2類が最も製作年代が古く位置付けられるものと推定された。ただし、1900年代の時点で既に、後出すると考えられる I b5類が収集されていることからみて（図12：4・5）、I b2類の製作年代はそれよりも大きく遡ることが想定される。

これを傍証する可能性がある資料として、ロシア科学アカデミー人類学博物館所蔵資料のcol.820-4があげられる⁽²⁹⁾。この資料は「赤獣毛」を用いた典型的な I b2類で、刀通しと房に見られる刺繍は、津田が古い技術として指摘したもの（津田 2016：192）と類似していることも注目される。

col.820は、1742年12月に博物館の前身が火災に見舞われた際に消失をまぬがれた資料とされ（荻原 1998：98）で、収集地は千島とされている。仮にこれらの情報が正しいとすれば、I b2類の製作・使用年代は18世紀前半に遡るとともに、分布は千島列島まで広がっていたことになる。

もっとも、馬場がサハリンで収集した資料の中にも、刀通しに類似した刺繍が見られるものが存在しており（市立函館博物館収蔵番号1331）、剝幣を用いて前後を連結するなど、その他の特徴にも共通点が多い。こうした類似点が、サハリンと千島列島の古い段階での関係性を反映したものなのかについては、収集以前の資料の移動や収集後の背景情報の取り扱いなど、他の要因が介在した可能性も排除しない、慎重な検討を進める必要がある。

その他に I b2類の上限年代を示す可能性がある背景情報を伴う実物資料は得られていない⁽³⁰⁾。

(3) 北海道とサハリンでの地域差の発現

前節で示した変遷観を前提とすれば、北海道では「赤獣毛」が木綿糸に置換すると同時に、胴部の経糸数が44～46本から36本前後へと減少したものと見られる。また、端部区画帯は I b2類が全ての資料で3帯なのに対し（図11：1～4、図14：1～3）、I b4類・I b5類では2帯の資料（図11：5～8、10・11）が多数を占めるようになる。

分類群の製作時期により近い年代を示す可能性が高い資料として、製作途上にある未製品がある。1912年にはV.N.ヴァシリエフが平取町で I b5類の未製品を収集していることから（図12：8）、この年代に、北海道では胴部の緯糸が全て木綿糸のものが製作されていたことは確実である。

一方、サハリンでは、1903年頃にB.ピウスツキが収集した資料に I b1類の未製品が含まれており（図12：6）、サハリンにおける I b1類の製作時期がこの前後を含むことは確実視できる。資料数が少ないものの、サハリンでは「赤獣毛」が使用されなくなったのち、染色した鞣皮を用いた I b1類や、これに木綿糸が加わった I b4類に置き換わった可能性が高い。

サハリンで収集された I b1類・I b4類は、経糸の本数は46本のもの（市立函館博物館資料番号1327）、60本のもの（図14：8）があり、I b2類と同程度か、多い傾向が認められる。また、端部区画帯は、I b2類が3帯なのに対し、4帯のものが認められ（図14：8）、増加傾向が認められる。これらの変化は北海道で認められた経糸本数および端部区画帯の減少とは正反対の傾向を示している。

資料数の限界はあるが、20世紀前半には北海道とサハリンでは刀帯の緯糸に木綿糸が用いられる頻度に違いが生じており、形態にも差異が生じていたものと考えられる。換言すれば、北海道アイヌとサハリンアイヌの刀帯には I b2類の段階では地域差は認めたいが、その後、地域差が発現したものと見なすことができる。

(4) 新たな製作技術の出現と普及

技法A2・B2の出現時期

対象資料241点のうち、緯糸の編みに技法A2ないしB2を用いるのは5点（2%）と極めて少ない。

一方、筆者が2015年・2016年におこなった調査では、

(29) 註10参照

(30) 三上（1968）や古原・村木（1998）が取りあげてきた『蝦夷志』・『三国通覧図説』掲載の刀帯の図は、房の表に3枚の別布が付される点や、刺繍が房の上半部に偏る点で、I b2類の中に類似した資料（図11：2・4）の存在を指摘できる。これを積極的に評価すれば、18世紀後半に I b2類が描かれていた可能性も指摘できないわけでは無いが、本稿の分類は素材や技法に立脚したものであり、絵図との比較でその年代を特定しようとするのは、方法から逸脱するものとなるだろう。

(31) 平取町で1名、白老町で7名の製作者について製作過程を観察し、ご教示いただいた結果に基づく。

胆振・日高地方で多くの製作者が技法A2・B2を用いる状況にあることを確認しており⁽³¹⁾、博物館収蔵資料と現在製作されているもののあいだには、製作技術について大きな差異が存在している。

背景情報を伴っている資料のうち、1950年代以前に収集された資料には技法A2・B2は存在せず、1958年以前に大部分の資料が収蔵されたと見られる北大植物園・博物館所蔵資料にも含まれていない。これらの事実からは、技法A2・B2は1950年代以前には極めて稀だった、もしくは存在しなかったものと推定される。

対象資料に含まれる5点の素材に着目すると、1点は肩部に麻糸を使用しているため便宜的にI b5類に含まれるものの、自製の靱皮繊維ではないことから、相対的に新しい特徴を示しているものといえる。その他の4点は、全て肩部・胴部ともに木綿糸を緯糸とする6類に該当し、中には経糸にビニールを使用したものも含まれる。麻糸の使用、木綿糸の高い使用率、ビニールの存在からみて、これらはI b5類よりも、さらに新しい製作に使用された可能性が高いものと判断できる。つまり、使用される素材の面からも、技法A2・B2が後出の技術であるという推定が支持される。

技法A2・B2を用いるもののうち、製作者が明らかな資料は旭川市博物館所蔵の1点(図7:2)のみであるが、この資料の製作者は旭川在住で、I b6類(図7:1)を製作した人物の次の世代に属する。旭川では戦後、2世代のあいだに技法A1・B1から技法A2・B2への変化が起こったものと考えられる。ただし、図7:2の製作者と同世代には、一世代前と同じく技法A1・B1で製作している人物も存在することから(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2001:10118)、技術の変化は地域レベルではなく、個人レベルで生じたものである点には注意しておきたい。

刀帯そのものではないものの、同じ製作技術を用いて製作されるものに葬儀用靴があり、1980年に浦河町の伝承者が製作した資料として、全体が技法B2で編まれている例が存在する(北海道博物館資料番号72133-2)⁽³²⁾。この資料から、遅くとも1980年代には、日高東部でも技法A2・B2への転換が一部で生じていたことは確実である。

新たな技法が普及した背景

2016年現在、刀帯について下記の三つの技術体系が併存している状況にある。

表5 2016年現在の技術体系の分類と使用地域

技術体系	経糸固定	編み技法	地域
1	一箇所固定	技法A1・B1	旭川市など
2	一箇所固定	技法A2・B2	浦河町・白老町・平取町など
3	二箇所固定	技法A1・B1	平取町二風谷

旭川市では、先述したように一時期、編みの技法A1・B1を特徴とする技術体系1と、技法A2・B2を特徴とする技術体系2が併存したものの、現在では技術体系1が主に使用されている。

日高東部では、技術体系2が前節で指摘した葬儀用靴を製作した浦河町の女性から、同町在住の別の女性に伝承されたことが明らかにされている(財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1992)。

技術体系3は、本稿4(1)で指摘した通り、1970年代後半に平取町二風谷で復元的に構築されたものである。

技術体系2・3は、いずれも1970～80年代に新たに出現したものではあるが、製作技術マニュアル(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2007)や各地で開催される講座などを通じて広く普及している状況にある。これは言い換えれば、広域に技術体系1が広がっていた状況から、複数の技術体系が併存する状況へと多様化が進行したことになる。

1970～80年代を境として、技術体系の多様化が進行した要因として想定されるのは、製作者の減少である。

平取町を含む日高西部では、岡村が1960年代におこなった聞き取りによれば、当時80歳代の女性が幼少期に祖母が作る姿を記憶している、当時70歳代の女性が16歳頃に母親が刀帯を製作している姿を記憶しており製作もできるという状況であったが(岡村 1962:35)、1978年には製作技術の伝承はほぼ断絶し、実物資料をもとにした技術復元が模索されることとなった(萱野 1980:195-196)。

北海道東部では、1980年代におこなわれた聞き取りによれば、1920年代に弟子屈に生まれた男性が幼少期に祖母が刀帯を製作する姿を記憶しているものの、1980年当時には技術の伝承者がいなくなっており、日高東部の製作者から購入する状況となっていた(北海道教育委員会 2003:53-54)。

このように、記録に残されている限り、1960～80年代には北海道内で刀帯の製作技術が伝承されている地域は旭川市、浦河町、新ひだか町静内などごく限られ、それぞれの地域に一人ないし数人という状況になっており、しかも、その中には本人は製作した経験がない場合も含

(32) 浦河町郷土資料館には、北海道博物館資料番号72133-2と同一の製作者によるとされる刀帯が所蔵されており、写真による限り、全体が技法B2で編まれている(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2003:資料番号73)。

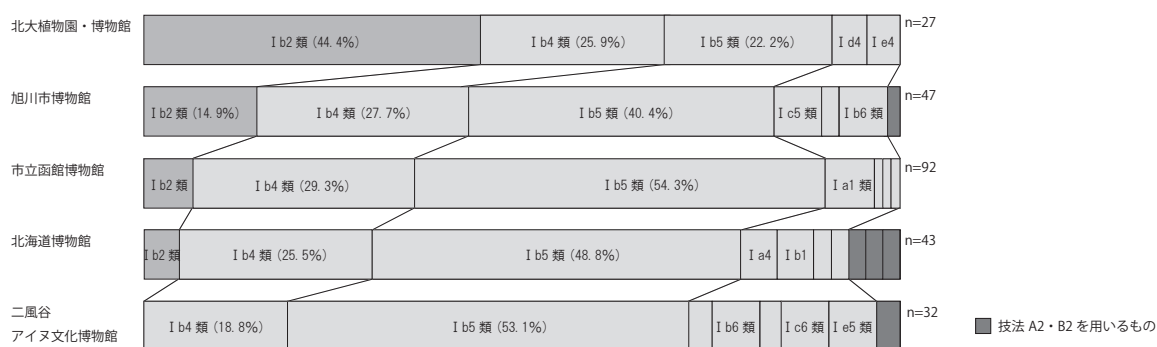


図15 北海道内主要博物館における刀帯の組成

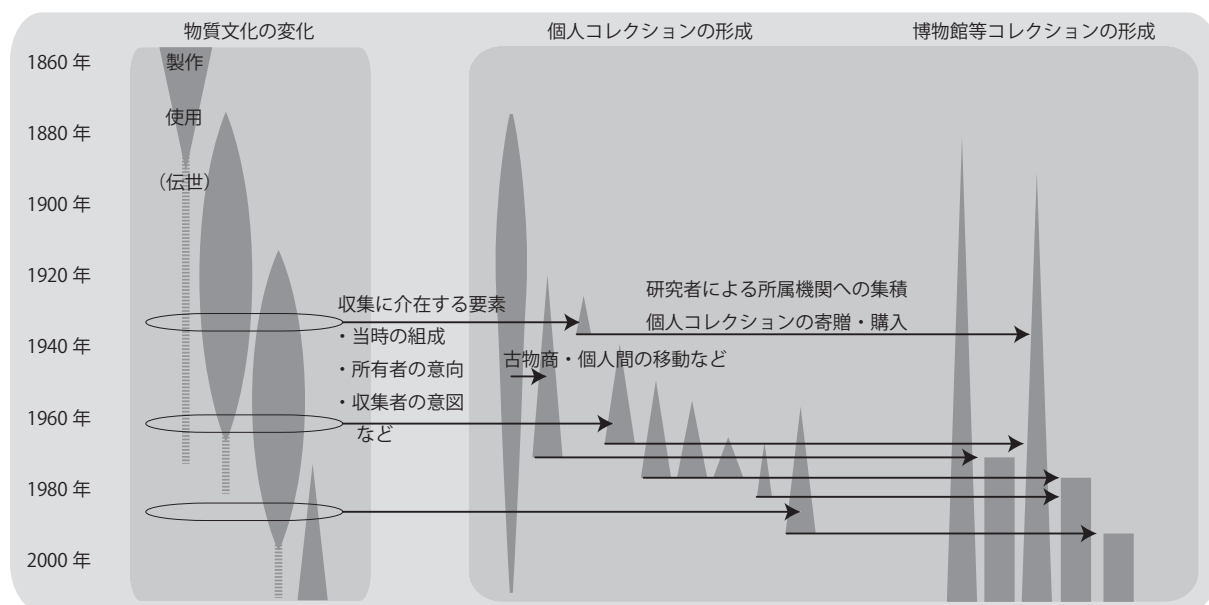


図16 コレクションの内容に影響を与える要素（概念図）

まれているという状況にあったことが分かる。

製作技術の伝承者が極端に減少した状況がボトルネックとして作用し、個人が起点となる大規模な技術体系の多様化が、比較的短期間で起こりやすくなっていた可能性が指摘できる。

6 各博物館所蔵資料における分類群の比率

ここでは、博物館所蔵資料の形成年代に着目することで、そこに含まれる類型の比率を通じて、民具の変遷が検証可能となる可能性を示す。

本稿で対象とした資料の形成年代は、北大植物園・博物館は1880～1950年代、市立函館博物館は1930～1970年代、旭川市博物館は1930～1980年代、北海道博物館は1980年代以前にその中心を求めることができる。二風谷アイヌ文化博物館妻沼コレクションはさらに新しく、1990年代以前と考えられる。

図15に、収蔵機関を単位とする組成の差異を示した。I b2類・I b5類に着目すると、最もコレクション形成

年代が古い北大植物園・博物館所蔵資料ではI b2類が全体の44.4%を占めるのに対し、最も新しい二風谷アイヌ文化博物館ではI b2類は含まれていない一方、I b5類の比率は22.2%と53.1%という大きな開きがある。

技法A2・B2に着目すると、1950年代以前に収集された北大植物園・博物館資料、1970年代以前に収集された市立函館博物館所蔵資料には全く認められないのに対し、よりコレクション形成年代が降る資料には少数ながら含まれている。

それぞれのコレクションが形成される過程には、研究者・収集家がどのような資料を収集しようと意図したか、所有者がどのような資料を譲渡しようものかと判断したかなど、様々な要因が複数の段階で介在することが予想される（図16）。そして、各博物館に集積された資料群が、どのような要因が作用した結果として集積されたものかを残された資料から全面的に復元するのは困難だろう。

このような限界はあるものの、収集年代が異なるコレクションの内容に認められる差異が、研究者・収集家が資料を収集する過程でアクセス可能な資料群の内容に、

年代による変化が生じていたことを反映しているものと解釈することは許されるだろう。

研究者・収集家がアクセス可能な資料には、年代を追ってI b2類の減少、I b5類の増加、技法A2・B2の出現という変化が生じていたものとみられ、これは、本稿で明らかにした刀帯の変遷と整合的といえるのである。

7 おわりに

本稿では、まず製作技術と素材に着目し、刀帯の共時的分布と通時的変遷を検討した。

分析の結果、刀帯の各分類群の分布は大きく重なっているものの、製作年代が異なるものと考えられた。先行研究では、「赤獣毛」を用いた資料が古く、サハリンを中心に分布する意見があった。本稿では、「赤獣毛」を用いるI b2類を相対的に古く位置づける先行研究の推測を追認しつつ、製作地・使用地が特定の地域に求められるとの仮説は棄却した。文様やその他の属性の連続性からはむしろ、I b2類はサハリン・北海道全域で後続する類型の母体となり、北海道ではI b5類へと連続的に変遷したものと考えられる。

本稿で論じてきた変化は、素材に着目した場合、アイヌ民族が自製した鞣皮繊維を中心とするものから、本州以南から移入された木綿糸へ素材が転換していく過程を具体的に明らかにしたものといえよう。

素材の転換が生じた背景については今後、文献学的研究が必要であるが、ここでは、明治前期に日本へ近代紡績が導入され、工業製品としての木綿糸生産が拡大するに伴い、北海道への流通量も増大し、これを直接的な契機としてアイヌ民族の物質文化が大きく変容した可能性を指摘しておきたい。

ここで指摘した変化は、従来指摘されてきた木綿衣のイラクサによる縫製から木綿糸による縫製への変化（古原 2007）などと連動する可能性もあり、今後、様々な研究成果を統合することで、より高い精度でアイヌ民具の変遷と、それを取り巻く歴史的動向の関係性を論じることが可能になるだろう。

戦後の資料の検討では、1970～80年代に、二つの新たな技術体系が出現し、普及していることを指摘した。このような製作技術の多様化は、従来やや漠然と把握されてきたアイヌ民族の物質文化の変化を具体的に明らかにするもので、変化が生じた契機や普及の経過を含めて可能な限り正確に把握しておく必要がある。ただし、明らかになった変化は、伝統文化をめぐるしばしばやりとりされる「正しい／誤った」伝承という評価軸とは距離を置いてみる必要がある。

変化が生じた背景には、編み上がりの質感や製作に要

する時間的コストなどに関わる製作者の積極的な選択や、技術の改良への試みが含まれている可能性が高い。現代まで、様々な民具を対象に展開されている技術継承の動きの具体相として、歴史的な位置付けをおこなっていくことが重要だろう。

謝辞

本稿の執筆にあたって、対象資料所蔵機関の飯岡郁穂氏（旭川市博物館）、大矢京右氏（市立函館博物館）、長田佳宏・関根健司両氏（二風谷アイヌ文化博物館）、加藤克氏（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園）をはじめ、多くの方々からご教示、ご協力を賜った。末筆ながら記して感謝いたします。ただし、当然ながら存在するであろう誤りは全て筆者の責による。

引用・参考文献

- 青柳信克 1997, 河野コレクションとその収集者, 欧米アイヌ・コレクションの比較研究 平成6～8年度文部科学省科学研究費補助(国際学術研究・国際学術調査)研究成果報告書, 名古屋大学大学院人間情報学研究所.
- 青柳信克編 1982, 河野広道ノート 民族誌篇1ーイオマンテ・イナウ篇ー, 北海道出版企画センター.
- 旭川市博物館 2000, 旭川市博物館所蔵品目録XIー民族資料／携行品関係ー.
- SPbアイヌプロジェクト調査団編 1998, ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録, 草風館.
- 大坂 拓 2016, 北海道アイヌの儀礼用冠についてー北海道大学植物園・博物館所蔵資料の検討ー, 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 1: 23-42.
- 大矢京右・大野徹人 2013, 市立函館博物館所蔵「椎久コレクション」: 八雲アイヌの民族資料とアイヌ語音声, 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 19: 33-73.
- 岡村吉右衛門 1962, 日高アイヌの編物 その一, 民芸手帳48, 東京民芸協会: 34-39.
- 岡村吉右衛門 1972, 「アイヌ造形研究」ノート, 玉川大学文学部論叢 12. (ゆまに書房編集部編 2001, アイヌ語考③語彙II, に再録)
- 岡村吉右衛門 1977, 日本原始織物の研究, 文化出版局.
- 荻原真子 1998, アイヌ文化研究におけるアイヌプロジェクトの意義, SPbアイヌプロジェクト調査団編1998, ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録, 草風館: 97-103.
- 荻原真子・古原敏弘・ヴァレンチーナ V. ゴルパチョーヴァ編 2007, ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録, 草風館.
- 奥田統己編 1999, アイヌ語静内方言文脈付き語彙集(CD-ROMつき), 札幌学院大学.
- 加藤 克 2004, 札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料, 北大植物園研究紀要 4: 1-54.
- 加藤 克 2008, 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について: 歴史的背景を中心に, 北大植物園研究紀要 8: 35-91.
- 加藤 克編 2012, 大学博物館所蔵古写真の現代的意義に関する研究(日本学術振興会科学研究費補助金(2009-2011年度)基盤研究(C)研究成果報告書), 北海道大学北方生物圏

フィールド科学センター。

萱野 茂 1978. アイヌの民具, すずさわ書店。

萱野 茂 1980. アイヌの碑, 朝日新聞社。

萱野 茂 1996. 萱野茂のアイヌ語辞典, 三省堂。

北原次郎太 2012. 二谷国松口述知里真志保筆録 新築祝いの祈り詞, 千葉大学ユーラシア言語文化論集 14: 263-305。

金田一京助・杉山寿栄男 1941. アイヌ芸術 第一巻服装編, (復刻版1973北海道出版企画センター)

小杉 康 1997. 物質文化からの民族文化誌的再構成の試みークリールアイヌを例としてー, 国立民族学博物館研究報告 21: 391-502。

河野広道 1933a. 樺太の旅 I, 人類学雑誌 48(3): 296-303(河野広道著作集刊行会 1971, 北方文化論 河野広道著作集1, に再録)

河野広道 1933b. 樺太の旅 II, 人類学雑誌48(5): 156-163(河野広道著作集刊行会 1971, 北方文化論 河野広道著作集1, に再録)

河野広道 1933c. アイヌのキケウシバシユイ, 人類学雑誌48(7): 365-375(河野広道著作集刊行会 1971, 北方文化論 河野広道著作集1, に再録)

河野広道 1953. アイヌの文様, 暮らしの手帖 21, (河野広道著作集刊行会 1971, 続北方文化論 河野広道著作集2, に再録)

河野広道 1958. 北の文様, カラーデザイン, (河野広道著作集刊行会 1971, 続北方文化論 河野広道著作集2, に再録)

小谷凱宣 2003. 明治時代のアイヌコレクション収集史再考ー国外アイヌコレクションの調査結果からー, 国立歴史民俗博物館研究報告 107: 251-265。

小谷凱宣・荻原眞子編 2004. 海外アイヌコレクション総目録 文部科学省科学研究費補助金(2001~2003年度)基盤研究(B)(2)研究成果報告書第2冊, 南山大学人類学研究所。

古原敏弘 2007. 研究動向(アイヌ)アイヌ文化研究の現状ー噴火湾沿岸のアイヌ資料ー, 噴火湾文化 3。

古原敏弘編 1999. バラートシバログコレクション調査報告書, 北海道立アイヌ民族文化研究センター。

古原敏弘・村木美幸 1998. エムシアツについてーアイヌ民族博物館が所蔵する児玉コレクションからー, アイヌ民族博物館研究報告 6: 35-60。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2001. 収蔵品目録2 杉村資料 I。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2003. アイヌからのメッセージーものづくりと心ー。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2007. アイヌ生活文化再現マニュアル 編むータラ・エムシアツー。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2008. アイヌの工芸ーペンシルバニア大学考古学人類学博物館ヒラーコレクションー。

財団法人アイヌ民族博物館 1993. 亮昌寺資料目録。

財団法人アイヌ民族博物館 1999. アイヌ民族博物館伝承記録4 川上まつ子の伝承ー植物編1ー。

財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1987. アイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集 フチとエカシを訪ねて 第4巻ー織る・奏でる・祈るー。

財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1991. アイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集 アイヌ文化を伝承する人々 第3巻ーイカラカラ・ノミ・イタクー。

財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1992. アイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集 アイヌ文化を伝承する人々 第4巻ー

ラッチャコ・アシリチェブ・シリキヘ。

佐々木史郎・古原敏弘・小谷凱宣 2008. 北海道内の主要アイヌ資料の再検討, 国立民族学博物館。

沢井春美・田村すゞ子 2005. アイヌ語帯広方言の資料: 田村すゞ子採録 広野ハルさんの基礎語彙調査報告, 札幌学院大学。

静内町教育委員会 1997. 静内地方のアイヌ文化。

市立旭川郷土博物館 1975. 市立旭川郷土博物館所蔵品目録 IV。

市立旭川郷土博物館 1978. 市立旭川郷土博物館所蔵品目録 VI。

市立函館博物館 1979a. アイヌの狩猟用具そのほか 国指定重要民族文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書 5。

市立函館博物館 1979b. 市立函館博物館蔵品目録-1民族資料篇。

杉山壽栄男 1940. アイヌの編物, 人類学雑誌 55(2): 63-79。

杉山壽栄男 1942. 日本原始織維工芸史 土俗篇。

高野啓子 2004. エムシアツの文様の調査研究(アイヌ女性の手仕事 1)。

田村すゞ子 1996. アイヌ語沙流方言辞典, 草風館。

津田命子 2003. アイヌの組紐ーアイヌの民具に見られる組紐の組成と種類についてー。

津田命子 2016. イカラカラーアイヌ刺繍の世界, 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編, イカラカラーアイヌ刺繍の世界。

出利葉浩司 1997. 20世紀前半におけるアイヌ社会の変容についての一試論ー日米アイヌコレクションの比較をととしてー, 欧米アイヌ・コレクションの比較研究 平成6~8年度文部科学省科学研究費補助(国際学術研究・国際学術調査)研究成果報告書, 名古屋大学大学院人間情報学研究科。

出利葉浩司 2002. マンローコレクションについて, 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編, 海を渡ったアイヌの工芸 英国人医師マンローのコレクションから: 88-97。

中川 裕 1995. アイヌ語千歳方言辞典, 草風館。

長谷部一宏 2000. 北方文化と二つのコレクションー馬場コレクションー児玉コレクションについてー, 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2000. 北の民 アイヌの世界。

北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・W・カーティスコレクション他資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第32集。

北海道開拓記念館 2003. 旧拓殖館所蔵民族資料コレクション 資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第37集。

北海道教育委員会 1988. 昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 VII(沙流・十勝地方)。

北海道教育委員会 1991a. 平成2年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査報告書 X(千歳)。

北海道教育委員会 1991b. 平成2年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ IV アイヌのくらしと言葉 2。

北海道教育委員会 2003. 平成14年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 16 アイヌのくらしと言葉 8。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編 2008. 北大植物園資料目録 6 アイヌ民族資料。

北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2005. ピリカ会関係資料の調査研究(北海道立アイヌ民族文化研究センター調査研究報告書 1)。

三上マリ子 1968. アイヌの刀綬(エムシアツ)の文様について, 北海道の文化 14. 北海道文化財保護協会。

山本祐弘 1970. 樺太アイヌ 住居と民具, 相模書房。

吉本 忍 2006. 第7章 北海道とその周辺地域にみる編みと織りの痕跡, アイヌ文化と北海道の中世社会, 北海道出版企画セ

ンター:121-163

吉本 忍編 2013, 世界の織機と織物, 国立民族学博物館.

挿図出典

図1-1:財団法人アイヌ民族博物館提供、2:函館市中央図書館提供写真を部分拡大。

図2:北大植物園・博物館提供写真に文字を記入。

図3-1・2・3:旭川市博物館所蔵資料を筆者実測・撮影、4:杉山 1940より許可を得て転載

図4〜6・9・10・12・15・16:筆者作図

図7・8・13・14:所蔵機関の許可を得て筆者撮影

図11:北大植物園・博物館提供

Sword Belt of the Ainu : Spatial Distribution and Temporal Change

OSAKA Taku

This article discusses the typological classification of sword belts used to wear swords for ceremonial use by the Ainu, as well as analyzes the spatial distribution and diachronic relations between types. In order to classify, emphasis is placed on production techniques and material selection.

The result of the classification revealed that the Ib2 type and Ib4 type are distributed in all areas of Hokkaido and Southern Sakhalin, while the Ib5 type is distributed in Hokkaido. All of the above were collected between 1880 and 1960, while there were overlaps in the years of use.

However, in terms of typological classification, the Ib2 type was the oldest, and assumed to have transitioned into the Ib5 type via the Ib4 type. A

comparison between the sword band collections of five museums in Hokkaido revealed that Hokkaido University Botanical Garden collection with the oldest collection has the highest ratio of the Ib2 type (44.4%) and the lowest ratio of the Ib5 type (22.2%). In contrast, Nibutani Ainu Culture Museum, which has the newest collection, contains no Ib2 type (0%), and the highest ratio of the Ib5 type (53.1%) in its collection (Fig. 15). Although this result has several points of consideration, it offers highly probable supporting evidence that illustrates the change of Ainu sword belt.

In addition, as a supplementary result of the analysis, it was clear that a change took place in production techniques since 1970.